
紫光は星空の彼方へ

綺羅星沙々羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫光は星空の彼方へ

【Nコード】

N7855Q

【作者名】

綺羅星沙々羅

【あらすじ】

第三種生命体と呼ばれる悪魔が跋扈する現代。

ハンターのライセンス取り立ての稲城紫は、初めての依頼で失敗してしまう。

兄弟子カルトにいいところを持って行かれた紫は、次の仕事をなんとかしても成功させようと心に誓う。

その夜、紫は第三種生命体の気配を追うが、後一步のところでは逃がしてしまう。翌日、第三種生命体の気配が消えたあたりを創作している紫は、雪路という青年に出会う。雪路は、昨日失敗した以来

の途中で助けた人物だった。

雪路は、ハンターである紫に「自分は第三種生命体の見ている映像を夢で見るんだ」と告げる。

紫は雪路の協力を経て第三種生命体を追う。

一方、紫の兄弟子であるカルトは、「妖術の暴露」という本を探すため、ソロモンの霊との契約に望む。

ソロモンの霊との激闘の末、契約に成功したカルトは、ソロモンの霊の力を借りて「妖術の暴露」という本の場所を聞き出す。

紫は雪路との距離を縮める。そして、紫は事件を追っていくうちに、雪路の秘密を知ることになる。

雪路の秘密を知った紫は、思い、悩みつつも、ある決断を下すことにする。

だって仕方ないじゃない！（前書き）

初めまして綺羅星です。

本作品は、オカルト的な内容を含みます。

調べて使用していますが、作品の性質上、意味と内容を変えて使用しています。

作品内で出てくるオカルトの用語などは、HPで紹介していますので参考にしてください。

まだまだ文章力に乏しいですが、一読していただけると幸いです。

だって仕方ないじゃない！

プロローグ だって仕方ないじゃない！

腹が減っていた。

喉が渴いていた。

喰らい尽くしても満ちる事はない。

何を飲んでも渴きは癒されない。

胸からわき起こる破壊の衝動。

真紅に燃え滾る激しい怒り。

尽き果てる事のない殺意。

沸き上がる漆黒の悪意。

目に映る物、全てを喰らいたかった。

嗅ぎ取る物、全てを破壊したかった。

本能の赴くまま、人を殺したかった。

全てが始まるのは、もう間もなくだ。

長かった雌伏の時間は、もう終わる。

目の前で人が死んでいた。

まだ若い女性だった。OLだろうか。ブラウスは切り裂かれ、ピンク色のブラジャーが弱々しい月明かりの下に浮かび上がっている。そこから僅かに下、腹部には縦に裂けた裂傷があり、まだ温かい内臓が飛び出している。手足は噛み千切られたように欠けており、肉片が其所此処に散らばっている。アスファルトは血で染まり、周囲には生臭い匂いが充満していた。

ここは何処だろう。

前後左右を見渡すと、ここが見知った場所である事が分かった。

閑静な住宅地。昼はそれなりに交通量のある通りだが、夜になると、めっきり人通りがなくなる場所だ。夜も遅いのだろう、住宅か

ら漏れる光はどれも弱々しく、ひっそりと静まりかえっている。

ああ、これは夢か。また俺は夢を見ているんだ。

近所で、こんな凄惨な事件が起こるわけではない。

ここ数週間、ずっと同じような夢を見ているな。

俺は映画でも見るかのように、夢を分析していた。

どうせこれは夢だ。何が起きてても不思議ではない。

初めてこの夢を見た時、俺はこの余りにもリアルすぎる映像に、恐怖に震えて飛び起きたのを覚えている。しかし、似たような夢が二度三度と繰り返されると、流石に慣れてくる。免疫が出来るとも言えばいいのだろうか。直視できなかった映像も、今では直視できる。周囲に気を配る事も出来るようになった。

タッタッタッタッタ……

どこからか足跡が聞こえてきた。

ザワリと、全身に悪寒が走った。

何かが来る。明確な意志を持って、こちらに向かって駆けてくる。逃げなければいけない。見つかつてはいけない。俺はそう思った。まだその時ではないのだ。

何故だか俺は焦っていた。

横たわる死体を一瞥した俺は、周囲に人影がない事を確認すると、足音が聞こえるのとは逆方向に駆けだした。その時、俺は十字路の片隅にあるミラーを見た。そこには、今まで見た事のない、異形の姿の生物が写っていた。

これには俺も驚いた。だが、俺はその姿よりも、逃げる事を優先した。驚きよりも、焦燥感があつた。いや、これは恐怖か。今まで感じた事のない恐怖という感情が、俺の中に渦巻いていた。

俺は必至になって逃げた。硬いアスファルトを思い切り蹴り、住宅の屋根の上に乗る。気配は依然としてこちらを認識しているらしい。距離が徐々に縮まってきている。

俺は逃げた。

兎に角逃げた。

何とか追跡者を巻き、俺は自分の^{ねぐら}厠に帰ってきた。

服を脱ぎ捨て、布団の中に潜り込む。

ミラーに映った自分の姿よりも、自分を追ってきた気配が気になった。あれは、アイツ等なのか。だとしたら、何としても、あと少しの間乗り切らなければいけない。

自分を追ってきた者。それが一体何であるか、俺には分からない。しかし、自分の命を狙う奴だと言う事は理解できた。それは、狩る者と狩られる者。自然界における弱肉強食の世界。食物連鎖の理。俺は、自分が捕食者から一転、次の瞬間には被食者になった事を、本能で感じ取っていたのだ。

麗らかな春の日差しが降り注ぐ土曜日の昼下がり。平日でも賑わうスクランブル交差点は、土日ともなれば人でごった返す。車のクラクション、人々の喧噪、あらゆる音がない交ぜになり、日常という空間を満たし、創りだしている。

それが、今日は違っていた。

街の中に人気はなく、車も一台も動いてはいない。信号が青になっても、スクランブル交差点を渡る人の姿は無く、車も停車しているだけで動く気配はない。

この世界から、人という存在を取り除いたような、そんな異様な空間。

デパートから流れてくるBGMを背に、一人の青年がスクランブル交差点の真ん中に立った。雲一つない青空を見上げ、眩しそうに目を細める。

ハンバーガーを囓りつつ、青年は携帯電話を耳に当てる。僅かなコイルの後、キンキンとした声が耳に飛び込んできた。

「ちよつと、カルト！邪魔しないでよね！」

稲城紫は、開口一番、電話の主に怒鳴り声を浴びせた。足を止め、時の流れから隔絶された街並みを見渡す。

僅かに毛先が膨らんでいるバルーンボブには虹色メッシュが差しており、フワフワした前髪は汗で濡れた額に張り付いている。大きな鳶色の瞳は忙しく上下左右を動き、何かを探していた。

「早くしろよな、妖魔攻撃隊が街を封鎖してられるのも、せいぜい十分。これで失敗したら目も当てられないぜ？俺まで先生に怒られる」

「わあゝってるっつーの！アンタが邪魔しなければ、もうちよつとであのワニ頭を何とか出来たのに！」

「ワニ頭？ああ、パネルカルプを召喚したか。まったく、『妖術の暴露』が翻訳されて一般に出回るとは。しかも、素人が召喚してこの騒ぎ、世も末だわ」

電話の向こうから、声の主、カルトの溜息が聞こえてきた。そして、その後には何かを咀嚼する音が続いた。

「ちよつと！アンタ、何か食べているでしょう！私なんてお昼抜きなのよお！」

カルトに怒鳴りながらも、紫は交差点を左折した黒い影を見逃さなかった。触れれば折れてしまいそうな、小枝のように細い足を懸命に動かし、障害物となっている自動車の列をハードル宜しく飛び越えていく。

一般的な尺度で見れば、紫は間違いなく可愛いと呼ばれる部類に分類されるだろう。普段は無邪気で子供のような笑顔を振りまく紫だったが、今日は違った。鬼気迫る表情の他に、他を威圧する強烈な気を小さな体から発していた。

下半身にフィットする黒いパンツに、臙脂色のジャケット。上下共にキラキラと輝いているのは、魔法金属の一つであるヒビイロカネを糸にして、それを絹と一緒に織り込んであるからだった。

「くつつつそ！なんでカルトや大地は簡単に敵を追い詰められるのに、私は逃がしちゃうわけえ？絶対におかしいわよ！龍因子も龍子も私だって負けていないはずなのに！」

「ったく、先生がいつも口を酸っぱくして言っているだろう？龍因子の強弱が、戦闘における絶対的な戦闘力の差にはならないって。要は使い方だよ」

「だって……！」

紫は交差点を曲がる。

三十メートルほど前方に、巨大な影が見えた。カルトが言っていた悪魔、パナルカルプ。レギナルド・スコットが言及した悪なる悪魔の一人だ。

肥大化したワニの頭が二つ。大きな鱗の映えた緑青色の体は、通常のワニとは比べものにならないほど太く、巨大だ。二足歩行をしているため、足は太いが長く、手にはナイフのように鋭く尖った爪がついていた。一見すると愚鈍そうに見えるが、動きは素早く、こうして紫と追いかけてくを続けている。

「見てなさいカルト！今度こそ、逃がさないわ！」

携帯電話を切った紫は、額に張り付いた赤と青の髪をうざったそうに掻き上げた。

龍子から発せられる龍因子が、紫の体に行き渡る。目に見えて肉体に変化はないが、膂力、脚力、耐久力、あらゆる身体能力が一時的に跳ね上がった。

ブーツの底でアスファルトを蹴り、パナルカルプとの距離を一瞬にして詰める。

こちらに背を向けていたパナルカルプは一つの頭をこちらに向けだが、逃げる様子はない。紫は薄い唇に笑みを浮かべた。

「サラヒエル、ファキエル、ツアクマキエル、サンクトウム・レグヌムの導きによりて」

紫の周囲に無数の光が出現した。スペルマスターである紫の声は、龍因子に反応し、強力な力を生み出す。発生した光は意志があるか

の如く、紫の回りを飛び回る。

パナルカルプとの距離が数メートルにまで近づいた時、太い尾が大きく振り回された。紫は走る速度を緩めることなく、ヒラリと跳躍すると、轟音を上げて振り抜かれた尾を躲した。

「仇なす敵を討ち滅ぼす力を、我に与えよ！」

紫の右手に光が集約した。後は、技の名前を言えばこのスペルは完成する。しかし、紫が技の名前を口にしようとした時、視界の隅に一人の青年の姿を捕らえた。パナルカルプの正面に、一人の青年が尻餅をついていた。

一瞬にして血の気が引いた。パナルカルプは逃げるのを止めたのでもなければ、紫と戦うのを選んだのでもない。逃げ遅れた人間を、殺そうと立ち止まっていたのだ。

「ダメ！」

このまま術を撃つては、パナルカルプもろとも青年を吹き飛ばす事になる。詠唱を中断した紫は、青年とパナルカルプの間に割って入った。

改めて近くで見るパナルカルプは巨大だった。身長は紫の三倍以上、優に六メートルはあるだろう。そんな巨大で異形の生物が目の前に居るというのに、紫の心は何一つ乱れていない。それどころか、漸く捕まえた獲物に喜びさえ感じていた。

唸りを上げて尾が紫に迫る。

「カーディナル！」

ポケットから取り出した一枚の布が大きく膨らんだかと思うと、一瞬にして白銀の盾へと変化した。盾を体に密着させ、腰を落とす。龍因子で強化された肉体が、紫の胴回りよりも遙かに太い尾の尻払いを受け止める。

激しい衝撃がカーディナルから全身に響き渡る。しかし、紫の体はほんの数センチ後退しただけ。踏ん張ったブーツがアスファルトを踏み砕いたが、それは仕方のない事だろう。

「君、速く逃げて！」

紫は叫ぶ。青年は、「あ、ああ……」と言いながら立とうとするが、腰が抜けて動けないようだ。大事そうに一冊の本を抱えた青年は、情けない顔をしてこちらを見上げてくる。

「何をやっているのよ！妖魔攻撃隊は！市民の誘導も出来ない何でホント使えないんだから！」

振り下ろされた腕を右に躲した紫は、盾の形状を保っていたカーディナルを槍へと変化させた。パナルカルプの攻撃は空振りだけで紫の髪を巻き上げる。直撃を受けたら、龍因子で強化された肉体と言えどもヤバイだろう。

不定形の魔剣カーディナル。紫の意志に従い、様々な武具へ変化するアイテムだ。一貫した形がないので本来の姿は分からないが、魔剣という名がついている以上、本質は剣なのだろう。しかし、紫の戦闘スタイルは遠距離なので、剣の形状にして戦う事は滅多にない。

「消えなさいよ！」

カーディナルで振り下ろされる爪を弾き返した紫は、鋭い踏み込みで槍先をパナルカルプの左の首に突き刺した。

ギンツ！

「あれ……？あたし、カッコわる！」

カーディナルの切っ先は分厚い鱗に阻まれた。紫が近距離攻撃を好まない理由の一つに、スタイルの違いと、この非力さが関係していた。

しかし、先ほどの一撃はダメージを与えなくとも、パナルカルプを後退させるには十分だった。地力で遙かに勝ってる紫。勝てないと分かってたからこそ、パナルカルプは最初から逃げていたのだ。

「今度はこれで！簡易結界ごと、撃ち抜く！」

三度カーディナルはその形態を変化させた。盾から槍へ、今度は槍から僅かにフォルムを変形させ長銃になった。龍因子をカーディ

ナルに注ぎ込み、純粋な破壊のエネルギーへと転化させる。そして、一秒にも満たないホールドの後、緑色の閃光が放たれた。

パナルカルプの展開している簡易結界を易々と貫き、緑青色の鱗に突き刺さる。

地を振るわせる爆音が周囲に轟き、パナルカルプの異様とも言える叫び声が響き渡る。その声は爆音を遙かに上回り、周囲に建ち並ぶビルのガラスを振るわせるほどだった。

濛々と立ち籠める煙。その中で巨大な影が動き、遠ざかっていくのが分かった。しかし、紫はすぐに追う事が出来なかった。

「あなた、大丈夫？怪我はない？」

跪いた紫は、腰を抜かして動けない青年に手を差し伸べた。しかし、青年は驚いたように顔を背けると、その手を払い除けた。青年は恐怖を紛らわすかのように、大きな本をギュッと抱きしめた。

「えっ……………」

一瞬言葉に詰まる紫。だが、青年はそんな紫の顔を見ると、「あっ」と声を上げ、「すみません、大丈夫ですから」と引きつった笑みを浮かべた。

「あ、うん……………なら、いいけど……………」

紫は手を振って周囲に立ち籠める煙を払い除けると、青年に妖魔攻撃隊が詰めている本部まで行くように指示をして、パナルカルプの気配を追った。

（うっん……………、やっぱり、ハンターって結構怖がられるのかな。可愛いだけじゃ、ダメなのかな）

あんな悪魔と互角以上に渡り合える人間。いくら紫が若く可愛いからと言っても、一般人の目には悪魔と同じように恐ろしい者として写ってしまうのかも知れない。

頭を振り気分を切り替えた紫は、パナルカルプの残した龍因子の残滓と、アスファルトに続くどす黒い血痕を追う。傷の程度は見ていないが、胸にそれなりの傷を負ったはずだ。先ほどのように俊敏に動き回る事は出来ないだろう。

交差点を一つ、二つと曲がった紫は、ついにパナルカルプの後ろ姿を捕らえた。明らかに弱っているが、悪魔が向かっている先、そこは車が流れる道路。妖魔攻撃隊が封鎖していない場所だった。

「げげっ！あそこに行かれたら、流石にやばいわ〜！」

暢気に語尾を伸ばしつつも、紫は全速力で駆ける。やはり、カーディナルの力不足は否めない。詠唱不要で使えるソロモンの印象や普通の魔法では、やはり一撃で目標を葬る事は出来ない。ならば、自分が選んだ道。詠唱に時間は掛かるが、威力だけは折り紙付きのスペルマスターのスペルをもって、一撃でパナルカルプを沈める以外ないだろう。車の往来が激しい道路に多少の被害が出るかも知れないが、悪魔をあちら側に出すよりは、マシだろう。

紫がそう決断した時、パナルカルプの進路に人影が見えた。

また？という気持ちは紫に生まれなかった。「しまった！」と思った瞬間、頭の中が真っ白になった。

「ダメ！危険よ！逃げて！」

そう叫んだ紫の手は、何もない虚空を掴んでいた。

パナルカルプは唸り声を上げながら、青年へと突進していく。

青年は逃げないし、動じない。

手にしたハンバーガーを包装紙に包むと、天高くそれを放り投げた。ハンバーガーが青い空に吸い込まれ、見えなくなった。

「ヤメテエエー！」

紫はあらん限りの声で叫んだ。

パナルカルプは止まらない。

パナルカルプの豪腕が、進路を塞ぐ青年に向かって振り下ろされる。

次の瞬間、幾筋もの光がパナルカルプの体を走り抜けた。瞬間移動と見紛うスピードで、青年はパナルカルプを通り越し、紫の背後に移動していた。手には春の日差しを受けて輝く細身の長剣、マクシミリオンが握られていた。

ドスンッ！

鈍い音を立て、パナルカルプは倒れた。体はいくつもの部位に分けて散らばり、周囲に腐敗臭に似た独特の異臭を放っていた。

「ああ〜ん、カルト、どうしてえ〜……？」

ペタンと、紫は冷たいアスファルトに崩れ落ちた。

「どうして〜、じゃない。お前がちんたらしてるからだよ。それに、俺じゃなくてパナルカルプに逃げろってどういう事だよ」

「後数秒あれば、あのワニちゃんを私が消せたのよ〜。ドツカ〜ンツでド派手なスペルでさ！それに何よお〜！ドサクサに紛れて私の体も斬ったでしょう！」

青年、カルトはマクシミリオンを虚空に消すと、遙か上空から落ちてきたハンバーガーをキャッチした。

「アホか。後数秒待ってたら、妖魔攻撃隊の作ったバリケードを越えて、市街に逃亡してただろうが。そうしたら、一体どれだけの被害が出る事やら。それに、お前のスペルは大雑把なんだよ。周囲に被害が出て後始末が大変だ。体を斬っちまったのは、勢い余ったからだ。といっても、ちゃんと選別して置いたから、何も斬れてないはずだぜ？」

「そ〜いう問題じゃないでしょうよ！ああ〜、あたしの初仕事だったのよお〜」

紫は兄弟子、カルトを恨めしそうに見上げる。

中性的な美貌の持ち主であるカルトは、時間軸さえも切り裂くと言われる霸王の神剣マクシミリオンの持ち主だ。特質すべき特徴は、異空間から瞬時にして剣を召喚できる事に加え、カルトの意識に反応し、切り払う対象を取捨選択出来ると言う事だった。先ほども、パナルカルプを斬り、紫を斬らなかつたのは、マクシミリオンの特質性があるからだった。

カルトは長い前髪を掻き上げると、後ろを振り返った。妖魔攻撃隊の作ったバリケードの向こうでは、怖い者見たさの一般人が集ま

っていた。

「初仕事、ね。これで三度目の失敗だ。まだまだ、だな」

左手でポンポンと紫の頭を叩いたカルトは、美味しそうにハンバーガーを囓った。

あたしだって一人前なんだから！（前書き）

プロローグでは、内容を掴んでもらうため、世界観などの説明を省きました。

一章では、世界観の説明をしつつ、物語の目的などを明示していくつもりです。

あたしだって一人前なんだから！

一章 あたしだって一人前なんだから！

春の夜風は、まだ冷たい。

桜の花びらが夜風に舞う。

これが最後の景色だろう。

短い人生だったが、後悔はない。

不思議と、心は満ち足りていた。

だから、俺は満足して逝く事が出来る。

唯一の心残りは、彼女の心がどうなるか。

俺は、彼女の心を連れて逝く事は出来ない。

彼女の心は、こちらに置いていくべきなのだ。

夜の七時を回った遊園地は静かだった。昼間の喧噪は嘘のように

消え、煌びやかなネオンの明かりが、優しい月光を打ち消している。

目の前に広がる湖には、コールドールのように黒い湖が広がって

いる。昼間はあれほど美しかった湖も、今は地獄の底のように暗い

湖面をたゆたわせているだけ。唯一の彩りとして、湖面には白い満

月が写り込んでいた。

「心配しないで」

俺は横に座る少女に声を掛けた。

「…………でも」と少女は小さく声を発すると、シユンと顔を伏せた。

まだ幼さの残る少女。高校一年生だが、中学生になったばかりだ
と言っても、まだまだ通用するだろう。

今まで生きてきた十七年間。何一つパツとしなかった人生だったが、最後にこの少女と出会い、終わりの間際までこうして一所に居

られる事は、まさに天がもたらした僥倖^{うわいせう}だった。

ベンチに腰を下ろしたまま、無言の時間が過ぎていく。辛い沈黙ではない。何も話さなくても、こうしているだけで良かった。少女は時折顔を上げると、空に浮かぶ満月を確認する。

「そろそろ、か」

俺が独り言のように呟くと、少女はコクリと無言のまま頷いた。彼女が僅かに動く度、髪から流れてくるシャンプーの甘い香りが鼻腔をくすぐる。

もう少しこうしていたかったが、タイムリミットは迫りつつある。俺が立ち上がるのが分かっていたかのように、寸分違わず少女も腰を上げた。

俺が歩き出すと、少女は真横に並んで歩く。光を受けて、少女の身につけている臙脂色のジャケットがキラキラと輝いた。少し大人びたように思える服装も、今の彼女にはよく似合っていると思う。

俺は今にも泣き出しそうな少女の顔を、目に焼き付けた。最後の瞬間まで、その顔を忘れないように。視線に気がついたのか、少女も僅かに目を上げると口元に優しい笑みを浮かべた。

俺たちが歩き出すと、待っていたかのように遊園地の照明が落とされた。昼間から夜へ、冷たい人工の光は姿を消し、空から降り注ぐ月光と星明かりが周囲を青く染めた。

少女が俺の手を握ってきた。小さいが温かい手だ。俺はその小さな手を優しく、壊れないように握りしめた。

終わりが、始まるうとしていた。

二十世紀初頭、世界は豹変した。

世界初の、全国家政府での同時中継。その内容は、見る人、聞く人を震撼させた。

それは、第三種生命体と呼ばれる生物の存在。長い間、国家が隠匿してきた異形の者。神話や物語の中でしか存在しないと思われて

いた、神や悪魔の存在。

政府は、人間や動物をこう位置づけた。

人を第一種生命体。犬、猫、魚、虫など、広義の生物を第二種生命体。そして、神話や物語などで登場する、悪魔や神、妖精や妖魔、精霊に悪霊などを、第三種生命体とした。

その基準は、第三種生命体の存在と共に発表された、龍子と龍因子の有無に関係があつた。

猿から人へ進化したと学者は言っているが、そこにはいくつもの疑問点がある。

類人猿から人類までの進化に掛かった時間は、およそ二千万年。その二千万年という時間を、長いと見るか短いと見るか、それは人それぞれかも知れないが、人間がこれ程までの文明を築きあげるまでに至った時間としては、明らかに短いという学者もいる。

そして、人類に起こった急激な進化には、外部から何らかの干渉があつたのではないか。少数派の学者は、そう定義していた。そして近年、人の中に新たな因子が発見された。

それが、龍子だ。

ミトコンドリアと同じく、エネルギーを発生させる龍子は、不思議なことに、猿や魚、鳥などの第二種生命体には存在していないのだ。人類の親戚と言われるチンパンジーでさえ、龍子は持っていない。そして、人類の驚異となる第三種生命体には、龍子が備わっているのだ。

政府は、人類の起源について、一つの種族の存在を定義した。それが、古代龍人だ。まだ文明を持たない人類と交わり、新たな人を産み落とした至高の存在。

かつての地球は不安定で、様々な所で空間が歪み、別の次元から強大な力を持った神や悪魔が来訪した。古代龍人も、別の次元から来訪した神の一つだと言われている。

古代龍人の力は絶大であり、不安定な空間に覆われていた地球を、結界を張って安定させた。空間が安定したことにより、別の次元か

ら地球にくるのは容易ではなくなった。

しかし、絶対数の少なかった古代龍人は、その力と文明を人類に託し、歴史の中に埋没していく。

古代龍人の展開した結界により、第三種生命体という外敵がいなくなった人類は、龍子を軽んじ、科学を尊重するようになる。長い年月が過ぎ、古代龍人の張った結界の力が徐々に弱まったことに、人類の大半は気がついていなかった。

政府は、第三種生命体と龍子、人類の祖となる古代龍人の発表と共に、もう一つ、新たな機関の発足を宣言した。

それは、第三種生命体に対抗する政府の組織。日本では、妖魔攻撃隊と命名された。

妖魔攻撃隊は、昨日今日発足されたわけではなく、遙か昔から、極秘裏に第三種生命体と戦いを繰り広げていたのだ。政府の巧みな情報操作により、その存在が公にされなかっただけで、第三種生命体と戦う人たちは、決して少なくはなかった。

日本政府は、妖魔攻撃隊の発足と共に、ハンターのライセンスを発行した。これは、特定の戦闘レベルと、龍子の総量によりランク付けされ、E、A、S、SSとその能力によりランク付けされる。

龍子は、極めて流動的で指向性のあるエネルギー、龍因子を発する。そのエネルギーにより、肉体を強化することも可能だし、使用者の意識を通して、様々な性質や効果を持つ魔法としても使用が可能だ。

結界の綻びから萌え出る第三種生命体。彼らは、発生した時から身に纏っている簡易結界により、銃などの既存の兵器では傷一つ与えることができなかった。第三種生命体を倒すには、簡易結界が無効とされる近接攻撃か、既存兵器を遙かに凌ぐ魔法による攻撃しかない。

つまり、第三種生命体を倒すには、ハンターでないと太刀打ちができないのだ。

政府の発表から百年余り。人々は第三種生命体という存在に戸惑

いながら、それを受け入れ、生活を続けていた。

満月まで、後七日。

飴色の光が重厚な室内を満たす。

ダークブラウンの絨毯が敷き詰められた室内には、マホガニーのデスクが四つ、一つは南側を向き、他の三つは北側を向いている。部屋の片隅には、本皮の三人掛けのソファが二つ、ガラステーブルを挟んで向かい合っている。

ソファーには、二人の青年と一人の少女が向かい合って座っていた。と言っても、青年二人は寄り添うようにして一冊の分厚い本を読んでいる。

「んもう！イヤになっちゃう！」

稲城紫はガラステーブルに足を投げ出すと、向かい側に座る二人を睨み付ける。睨み付けられた二人は、チラリと紫の小さな素足に目をやると、興味なさそうに鼻を鳴らし、再び本に目を落とす。

「良いじゃないか、別に」

「バイト代は入るんだし」

「カルトは良いわよね！」

口を尖らし、向かって右側に座るカルトに突っかかる。

「ちゃんと仕事をしたんだしね。本当は、私の仕事だったんだけどね」

「詳しい話は聞いてないんだけど、一体どうしたんだ？随分手間取ったみたいだな」

左側に座る青年は本から目を離すと、初めて紫を見た。

常に悪戯な笑みを浮かべている童顔な青年、草薙大地。生まれつき色素の薄い髪は茶色で、高校では染髪疑惑が常に持ち上がっている。というのも、素行不良の彼は高校入学初日に不良グループを病院送りにし、停学処分を受けているのだ。それ以降、大地は不良の

レッテルを貼られてしまった。

紫はガラステーブルから足を退かすと、僅かに身を乗り出して大地に懇願するように言った。

「だつてさ、街の中に逃げ遅れた人がいたんだもん。その人を助けてたら、ワニちゃん逃がしちゃって」

「その人、怪我はなかったのか？」

「ギリギリの所で助けたんだけど、色々あってね。妖魔攻撃隊がちゃんと一般人を誘導してくれないから」

「仕方ないさ。でもま、人助けをしたんだ、もう立派なハンターだよ。紫も漸くボク達と肩を並べたな」

「あら、大地、嬉しい事言ってくれるわね」

紫が笑うと小学生のようにも見える。しかし紫は、つい先日高校に入学したばかりの十六歳だった。前に並ぶカルトと草薙大地は、一つ上の高校二年生だ。

「その人は、どんな人だったの？」

分厚い古めかしい本から目を上げず、カルトは興味なさそうに尋ねる。

「どんな人って、良く覚えてないけど、私よりも少し年上かな。大事そうに本を抱えていてね、雰囲気はそうね、カルトに少し似ていて格好良かったなあ」

「十分覚えてるじゃないか」

そう言つて、ボタンとカルトが本を閉じると、部屋のドアが開いたのが同時だった。

入ってきたのは、目を疑うほどの美女だ。彼女の名はセリス。海のように深い色の隻眼に、燦然と光り輝く陽光のようなプラチナブロンド。二十代後半の淑女だ。セリスは紫達三人の師匠であり、三人からは「先生」と呼ばれている。

「お疲れ様、紫。どうだった、実戦は？」

部屋の空気をゆっくりと掻き混ぜながら、セリスは紫の隣に腰を下ろした。セリスがいるだけで、部屋の空気がピリツと引き締まっ

た様に感じる。

「大したことなかったわよ。でも、失敗しちゃったけど……」

「ふふ、流石の天才少女もこればかりは一筋縄じゃないわね」

「む………！」

紫がセリスに弟子入りして約三年。カルトと大地は小学生の低学年からセリスに弟子入りして鍛えられている。二人との実力の差は歴然としているが、それでも、紫は今年に入ってハンターのライセンスを取得した。それも、SS（スペシャルS）クラスだ。日本でも数百人しか持っていないSSクラスのライセンスだったが、セリスから言わせれば「まだまだヒヨコ」だそうだ。

「先生、私も異名が欲しい！ハンターになっただし、格好いいのが欲しいよ」

紫は、甘えるようにセリスの腕を取る。白い肌に良く映える黒いイブニングドレスを纏ったセリスは、紫の手をヤンワリと外すと、その手を持つて軽く握った。

「そんな物もらってどうするの？邪魔なだけじゃない」

「だって、先生は『ホワイトレーイン白い破滅』って呼ばれているし、大地は『オリエンタルペンタクル東洋の五芒星』、カルトは、カルトは………特にないか」

「あるよ！カルト・シン・クルトって名前がすで異名だ。カルトなんて名前の日本人が何処にいるよ！」

「あつ、そうだったわね。カルトなんて、古代龍人の王様の名前だよー！」

「おいおい紫、異名はな自分で付ける物じゃない。畏怖の念を持って付けられる物なんだよ。カルトの場合は、マクシミリオンを持ってるだけで確定だけだな。ボクなんて、結界士を何年もやっていて、漸く呼ばれるようになったんだぜ？」

「結界士で東洋の五芒星でしょ？先生とカルトは魔法剣士でえー、白い破滅とカルト・シン・クルト。私はスペルマスターだから、ナントカカントカの魔女とか、ラブリーウィッチとかがいいな」

「お前、人の話聞いてねーだろ？」

大地の言葉を完全無視した紫は、期待の籠もった眼差しでセリスを見やる。セリスの碧眼に、虹色メッシュに瞳を輝かせた紫の姿が映り込んでいた。

「とりあえず、仕事成功させてからよ。紫の実力なら、すぐに異名がつくわ」

パアツと紫の顔を綻ぶ。セリスは面白そうに紫を見て、ポツリと呟く。

「もっとも、紫の場合は不本意な異名を付けられそうな気もするけどね」

その言葉に、カルトと大地が一斉に吹き出した。

「街破壊の魔女とか…」

「ラブリーじゃなく、トラブリーな魔女とかな！」

カルトと大地が紫を挑発する。

「ちよつとおゝ！バカにするな、その二人！あたしはね、ド派手なモットーにしているのよ！あんな達みたいな、魔法を帯びた剣で切ったり、結界や呪符を使ったチマチマした戦いは、あたしには向いてないのよ！」

「性格が大雑把なだけだろう」

「龍因子の微細なコントロールが出来ないと、結界士も魔法剣士もできないんだよ」

「あゝゝゝ！言ったわね！あたしをバカにして！もう許さないんだから！なにさ！大地なんて注意力散漫な結界士って言われてるくせに！あたし知ってるんだからね！」

紫はビシッと大地を指さす。

「雪女を倒しに行った時、あんな、相手が雪女と分かっていながらデレデレして、氷付けにされたでしょう！女を見ると本当に甘くなるんだから！そんな事だから、いつも依頼人をカルトに取られるのよ！」

「取られるって……！取られてねゝ！依頼人が勝手にカルトに惚れるだけだ！」

「でも、それでショック受けてるよな、お前は」

カルトは勝ち誇ったような笑みを浮かべる。しかし、そんなカルトに対しても紫は矛先を向けた。

「アンタだってそうよ、カルト！ 麟世さんと知り合って漸く社交的になってきたけど、それまでは何？ 王様の名前と剣を引き継いでおきながら、人とともに視線すら合わせられないチキン野郎だったじゃない！ まだ麟世さんに告白だっしてていないんでしょう？ あれほど綺麗な人、早くしないと他の男のものになっちゃうわよ！ いうか、カルトに麟世さんはもったいないわ！」

「なっ！ 麟ちゃんとは……告白とかそう言う関係じゃ………」

ギャーギャーと喚く紫。いつもと変わらないこの風景。セリスは少しの間、弟子達のそんな風景を楽しんでいたが、いつまで経っても漫才のような掛け合いが終わらないのを見て、コホンと咳払いをした。水を打ったかのように、場が静まりかえる。

「バカ騒ぎは後でして頂戴。それよりも、一件、仕事があるわ。今回の依頼主は、また妖魔攻撃隊よ」

「またですか？ 翼の奴、たまには自分でやればいいのに」

カルトが深い溜息を漏らす。

「妖魔攻撃隊のお仕事って、確か安いよね？」

「かなりね。ま、ハンターと言っても、妖魔攻撃隊は公務員だからな。給料はそこそ良いにしても、やっぱり公務員、たかが知れてる。第三種生命体と戦っていつ死んでもおかしくないんだ、安い給料じゃ人も集まらないだろう」

「奴等には同情するよ」と、大地は付け加えた。

「でも、普通の人フリーのハンターを雇うには、大金が必要となるわ。そんな人達が頼りになるのは、妖魔攻撃隊よ。例えハンターとしての質が落ちようとも、妖魔攻撃隊が先頭に立ってこの日本を守っている事には変わりはないわ」

「ま、そうですね」

先ほど、カルトが口にした翼というのは、妖魔攻撃隊一番隊隊長。

つまり、妖魔攻撃隊のトップに立つ人物の名だ。年は紫よりも三つ年上の十九歳。妖魔攻撃隊は、勤続年数や勤務態度で出世するのではなく、ハンターとしての実力で出世していくのである。十九歳で妖魔攻撃隊のトップに立てるほど、翼の実力は抜きん出ていると言う事だ。

妖魔攻撃隊は各都道府県に支部を持ち、ライセンスがBクラスから三番隊に、Sクラスになると二番隊、SSクラスになると一番隊になる。上に行けば行くほど人の数は減っていき、一番隊のメンバーは全部で二十名ほどしかない。

その為、各都道府県の支部で手に負えないほどの事件が来ると、それらの依頼は格安でフリーのハンターに振られる事となる。妖魔攻撃隊からの依頼は、余程の事情がない限り、破棄する事は出来ない。ライセンスを取得する代わりに、それなりに責任を負うのが、フリーのハンターなのだ。

「で、依頼内容は？」

大地がセリスの手にした封筒を見やる。

その封筒には、依頼内容が記された紙が入っている。手にしている封筒は二つ。一方には依頼内容の書かれた紙が入っており、もう一方には何も入っていない。誰にでもこなせる仕事の場合、こうしてくじ引きの要領で仕事を振るのがセリス流だ。

紫の眼差しは、自然とセリスの手に惹き付けられる。何としてまた仕事を回してもらい、今度こそ成功させなければいけない。

「簡単な内容よ。最近、市内で毎日のように起きている殺人事件は知っているわよね。その犯人が、第三種生命体だと判明したわ。妖魔攻撃隊の支部から送られてきた情報では、恐らく、相手は潜伏成長型の第三種生命体よ」

「潜伏成長型っていうとお」

紫は頬に指を当てた。

「人に寄生する、もしくは、人に成り済ましている第三種生命体だ。大旨、性格は狡猾で残忍。龍因子を消すのが上手くて、なかなか見

つけられない。事件が長引くケースが多い」

「ああ、それぞれ」

カルトの説明に、紫はパンツと手を打つ。

例外はあるが、第三種生命体は潜伏成長型に、捕食成長型と発展発生型という三パターンに分類されると言われている。

潜伏成長型はカルトが説明した通り。捕食成長型は、人を喰らうてどんどん強くなっていくタイプ。性格は単純で、隠れる事も滅多にしない。日中戦ったパネルカルプは、捕食成長型だ。被害は大きくなるが、発見が早いため事件の解決は早いのが特徴といえる。そして、発展発生型。これは、この世界に生じた瞬間から、強大な力と高い知能を併せ持っているタイプ。最初から完成されているため、人を喰らう事はないが、暴れ出したら止めるのは困難だ。ドラゴンや有名な悪魔、大天使や神と呼ばれる者達が分類される。

「カルトは別件で動いてもらってるから、今回の仕事は大地と紫の二人の内どちらかよ」

セリスは二つの封筒をテーブルに置いた。紫は、すぐに手を伸ばすと二つの封筒を握りしめた。

「ハイハイ！あたしがやります」

「はあ？お前、大丈夫か？相手は潜伏成長型だぞ。今日みたいに、妖魔攻撃隊が舞台をセットしてくれるわけじゃないんだぞ？こういう仕事は、ボクの方が向いている！」

「大丈夫よ！あたしだって、もう一人前なんだから！あんた達二人の手は、煩わせないわよ」

「まあ、良いじゃない大地。とりあえず、紫に任せてみましょう。ただし、いいわね、紫」

セリスの発する気が変化した。室内の温度が、一瞬にして下がったように感じられた。

「今度失敗したら、少しお仕置きよ？分かったわね？」

お仕置きという言葉に、紫の手は震えた。手にした二つの封筒が、突然重く感じられた。しかし、もうこの封筒を置く事は出来ない。

セリスが承諾してしまった以上、この仕事は紫が解決するしかないのだ。

「あ、あのぉ、先生、あたし女の子だから、手加減してね」

「分かってるわよ。安心しなさい。これは連帯責任と言う事で、二人の兄弟子にも責任をとってもらうから」

その言葉を聞き、ホツと胸を撫で下ろす。カルトと大地が一所ならば、何も問題はない。どだい、紫はセリスの一撃で混沌してしまうのだ。あとは、紫の代わりに二人が半殺しに合えば済む事なのだ。だが、セリスの言葉に納得できないのは前に座る二人だろう。今度ばかりは、カルトも顔を引きつらせて反論している。

「ちよつと待つて下さいよ！だったら俺がやりますよ！怪しい奴を、片っ端からマクシミリオンで斬つてやる！マクシミリオンの特異性があれば、人に巣くう第三種生命体だけを斬る事だつて出来るんだし！」

「いいや、ボクがやります！ボクなら、確実に第三種生命体を見つけられる！」

「ダメよ、もう決まった事なんですから。それに、二人は補習があるでしょう？お情けで進級させてもらったんだから、一年生で足りなかった授業時間、補填してきなさい」

セリスの言葉に、「うつ」とカルトと大地は言葉を詰まらせる。

この隙を突いて、紫は立ち上がった。

「じゃあ、先生。すぐにでも仕事始めるわね！」

ウイंकを残し、紫は部屋から出て行った。扉が閉まる時、セリスは「で、カルトの方は順調？」と聞いていたが、紫は関与しなかった。自分のやるべき事は決まっている。被害を最小限に抑え、この仕事を何としても成功させるのだ。

G県T市。関東平野の北部に位置するこの街は、東京の様に煌びやかで絢爛豪華に発展してはいないが、地方都市としてはまずまず

の規模を誇っている。

紫は商業ビルの屋上に立ち、目を細めた。北関東特有の強い風が、紫の髪を波打たせる。

光を纏ったビルの足元には、様々な飲食店や居酒屋が並ぶ雑多な繁華街が広がっていた。普段ならば聞こえて来る下界の喧噪も、今日は強い風の音に紛れてしまい聞こえてこない。

時刻は午後九時を少し回ったところ。紫はビルのへりに足を乗せると、ジャケットのポケットから三枚の呪符を取り出した。セリスの屋敷が出る直前、大地の部屋に忍び込み数枚の呪符を失敬したのだ。これさえあれば、第三種生命体の気配を寄り敏感に察知する事が出来る。

龍因子を呪符に注ぎ込み、空高く放る。良く晴れた夜空に、純白の呪符が舞う。呪符はヒラヒラと舞い落ちると、紫の周囲に留まらず、そのまま風に流されて夜の市街地へと吹き飛ばされていく。呪符は、あつという間に紫の視界から消えてしまった。

「……………」

咳払い一つ。紫は気を取り直すと、再び目を細めて市街地を見つめた。

すでにフェンスを越えているため、少しでもバランスを崩せば数十メートル下に真っ逆さまだったが、恐怖心はない。そもそも、落ちたら死ぬと思うから怖いのであって、ハンターならば、ビルの屋上から落ちたところで死ぬどころか掠り傷一つ負いはしない。

紫は深呼吸をして目を閉じると、体内の龍子に意識を集中した。

龍子から放出された龍因子が体内を巡り、夜の街へと放出されていく。この拡散した龍因子が、第三種生命体の龍因子に当たると、微かな反応として位置を教えてくれる。レーダーと同じ要領だ。一般人は龍因子の総量が元々多くないため透過してしまうが、第三種生命体は龍因子の塊と言っても過言ではないから、紫の放った龍因子が当たれば反応が返ってくる。もっとも、それは相手が龍因子を発散した時の場合だ。気配を消し、ジッと身を潜めているのならば、

この方法では永遠に見つける事が出来ない。それに、狙った相手を見つけ出すと言う事も出来ない。もしかすると、関係のない第三種生命体やハンターの居場所を感じ取ってしまう場合もある。

（妖魔攻撃隊からの報告だと、相手は一日に一人ずつ人を殺しているんだったわね。だったら今日だって……。この方法は少し疲れるけど、そんな事も言っていられないわよね）

何としても、一人で仕事を達成しなければいけない。そうしなければ、紫はいつまで経っても一人前として認めてもらえない。何歩も先に行っている兄弟子達に、少しでも追いつくために。

紫は目を開ける。こうして見下ろす街は平和そのものだ。第三種生命体の存在が発表されて一世紀と少し。人々は第三種生命体の存在を受け入れたが、本当のところは、受け入れたのではなく、人事だと思っているだけなのだ。

古代龍人の張った結界が弱まり、第三種生命体が多数出現するようになったが、人類の数から言ったらほんの僅か。第三種生命体の姿を見ず、一生を過ごす人の方が圧倒的に多いだろう。しかし、第三種生命体は確かに存在している。人々は、薄氷の上で生活している様なものだ。危険は常に身近に存在している。氷が割れて落ちてしまえば、自力では抜け出す事の出来ない無辺の闇が広がっているのだ。

そのような人達のために、ハンターは存在している。紫がセリスに助けてもらったように、紫も第三種生命体に怯える人を助けたいのだ。その為には経験を積み、もっともつと強くならなければいけない。

「ッー」

背中を細い絹糸で引つ張られるような、微かな反応を感じた。紫は振り返ると、フェンスを跳び越えてビルの反対側へ移動した。紫は神経を針の先のように尖らせた。光る街並みに目を凝らし、ジツと獲物が掛かるのを待つ。

「……………来た！」

紫の放った龍因子が、第三種生命体の反応をキャッチした。距離は、ここから一キロ程度離れているだろうか。市街地から少し離れた住宅街のようだ。

「いくわよ、あたし。成功させるわよ、紫！」

紫はフェンスの上に飛び乗ると、そこから夜の街へ向けてダイブした。小さな体が加速度を増して落下していく。暗くて見えなかったアスファルトの地面が、一瞬にして目の前に広がってきた。紫は落下の衝撃を細い足二本で受け止めると、何事もなかったかのように立ち上がった。ポカンと口を開けてこちらを見つめる酔っぱらいに愛想笑いを振りまきながら、先ほど返ってきた反応を頼りに、そちらへ向けて駆けだした。

人の脇をすり抜け、車の上を滑りながら進む。信号を無視しようがお構いなしだ。ハンターのライセンスは、イコールで殺しのライセンスだ。人を殺そうが、街を破壊しようが、第三種生命体を討つという名目ならば、一切罪に問われる事はない。

人の多い繁華街を抜け、紫は静かな住宅街へと入った。

チカチカと明滅する街灯。

湿り気のある風が流れる。

そう遠くない場所から、まとわりつくような龍因子を感じる。

気配から察するに、どうやら相手は止まっているようだ。

紫はマフラー代わりに巻いていたカーディナルを手にとると、小降りのナイフに変化させた。一車線の細い道だ。ここは小回りの効く武器の方がいい。

気配を消し、流れてくる龍因子を頼りに歩を進める。路地を一つ、二つ曲がった時、ツンツと鼻をつく異臭を嗅いだ。血の臭いだ。「しまった……！遅かった？」

紫は駆けだした。胸の鼓動が早くなる。匂いからしてかなりの出血だ。これが人間だとしたら、恐らく、相手はもう……。

紫の気配を感じたのか、相手が動いた。紫が丁字路を右手に折れると、目の前にポツンと街灯が一つ灯っていた。冷たい光が照射さ

れているその先には、血にまみれた一人の女性が横たわっていた。女性の手足は千切れ、胴体から離れた首は街灯の足元に雑に転がっている。生死は確認するまでもない。

これでは、スポットライトに照らされた悪趣味なステージだ。

紫は歯ぎしりをした。

遅かった。助けられなかった。もし、これが紫ではなく、カルトや大地だったら結果は変わっていたかも知れない。せめて、紫が大地から拝借した呪符を巧く使えていたら。街へ消えてしまった呪符を見送ってしまった自分に、紫は激しい怒りを感じた。

どうして自分はこんなにも迂闊なのだろう。注意力が散漫なのだろう。これでは、大地の事を悪く言えない。

自分への怒りはそのままに、紫はこの悪趣味な演出をした第三種生命体を探った。

後悔しても始まらない。ならば、次に同じ後悔をしないためにも、邁進しなければいけない。その為には、まずは彼女の命を奪った第三種生命体を倒す事だ。

紫は遠ざかる第三種生命体を追った。相手は潜伏成長型だ。次も都合良く相手の気配を捕らえられるとは限らない。何としても、ここで滅しておくべきだ。

第三種生命体の龍因子を追った紫だったが、不意に相手の気配が消えた。龍因子の残滓さえ残さず、消え去った。

「まさか、逃がした……？」

第三種生命体の気配が消えた場所まで来た紫は、目の前に佇むアパートを見上げた。アパートは四階建てで、一階につき四部屋あるようだった。どの部屋にも明かりが灯っていた。

紫はもう一度、第三種生命体の気配を探ったが、やはり、第三種生命体はこの辺りで忽然と姿を消してしまったようだ。アパートや一戸建て住宅が密集したこの場所で、第三種生命体は消えたのだ。「くっそッ、こんな事なら、大地から呪符のちゃんとした使い方を習っておくんだったわ」

顔をしかめた紫は、途方に暮れたように周囲を見渡しながら、虹色メツシユの髪をクシャクシャと掻きむしった。

カルト・シン・クルト。白河麟世は、コップを洗う手を休め、古代龍人の王の名を持つ青年を上げしげと見つめた。

庇のように長い髪の下には、女性と言っても通じてしまうような、中性的で美しい美貌が隠れている。麟世の視線に気がついたのか、カルトは分厚い本から目を上げると、ニコリと笑ってコーヒを一口啜った。

「どう？バイトは慣れた？」

「うん、お陰様だね。アルルーナの店長も優しくしてくれるし、とても働きやすいわよ。私ね、昔からこういう純喫茶でアルバイトしてみたかったんだ」

「そう、それは良かった」

そう言って、カウンターに腰を下ろしたカルトは、再び本に目を落とした。時刻は午後十時を回っている。すでにアルルーナは閉店しており、照明もカウンターしか灯っていない。厨房では店長が明日の仕込みをしている。

パステルカラーを基調とした店内は明るく、喫茶店と言うよりもファミリーレストランといった趣だ。制服であるパステルチェックのミニスカートの、シックな黒いブラウスは可愛らしく、女子高生にも人気がある。夕方には高校生や仕事帰りの社会人などで席が埋まってしまっただけだ。

だが、閉店を迎えた喫茶店『アルルーナ』は、麟世とカルトだけの特別な空間だった。

半年ほど前までは、彼の事を空気よりも存在の薄いクラスメイトだと思っていた。学校を休みがちで、誰とも深く付き合おうとしない。虐められているわけでもないのに、登校拒否の一手手前。草薙大地同様、麟世はカルトの事を余りよく思っていなかった。しかし、

それは麟世の一方的な思い込みだった。

白河家の呪いのため、麟世はある第三種生命体に命を狙われた。その時、母親がセリスに依頼をして、派遣されてきたハンターがカルトと大地だった。二人は、本業である学業そっちのけで、バイトであるハンターの仕事をしていたのだ。学校に来たくてもこれない理由があり、人と仲良くしたくても出来ないジレンマがカルトにある事を知った。

あの事件を切欠に、麟世とカルトの距離は急速に縮まった、と思っていたのだが、いくら麟世がそれとなく自分の気持ちを伝えても、カルトは全くの無視。いや、純粋に麟世の気持ちに気がついていないのだ。しかし、こうしてカルトは麟世のバイト先まで来てくれるし、家まで送ってくれる。決して脈が無いわけでないのだ。ただ、カルトは誰よりも臆病で、自分の領域に人を入れようとはしない。

麟世はカルトの過去を知っているため、無理に彼の懐に入り込むとは思わない。少しずつ、カルトが麟世を受け入れてくれるのを待つだけだ。今は麟世の片思いかも知れないが、いつかきっと両思いになれると信じている。

「所で、カルト君。ここ数日ずっと本を読んでいるけど、何をしているの？何か、捜し物？」

「捜し物、と言えば捜し物かな。妖魔攻撃隊の依頼でさ。ただ、いくら探しても見つからなくてね。仕方ないから、捜し物を見つける方法を見つけてる」

「は？」

コップを洗い終えた麟世は、身を乗り出してカルトの読んでいる本を覗き込む。カルトは僅かに身を逸らすと、麟世が読みやすいように本を百八十度回転させてくれた。

「これ、ハンターのライセンスを持っている麟ちゃんなら見た事あるでしょう？」

「もう、からかわないでよカルト君。私なんてCランクよ。誰だっ
て記念に取れちゃうレベルのライセンスなんだから」

そう言った麟世だったが、確かにカルトの言う通りだった。この本は、読んだ事はないが見た事はある。かなり有名な、あの本だ。「これって、もしかすると『レメゲトン』？」

「正解。十五世紀から十八世紀に掛けて記された『グリモア』の一つ。レメゲトンの第一部『ゴエティア』だよ」

「ゴエティアって言うと、確か、ソロモンの霊が列挙されている、あれよね？」

「そう、そのあれだよ。ちなみに、第二部は四方の悪魔を取り扱う『テウギア・ゴエティカ』、第三部は天使と黄道十二宮を扱う『パウロの術』、第四部は『アルマデル』で邪悪な精霊を列挙しているんだ」

「どうしてカルト君が今更？ソロモンの印象の復習でもしているの？」

「そんなの復習するくらいなら、学校の勉強をするよ」

それもそうだ。カルトはもちろん、にわかハンターの麟世でさえ、ソロモンの印象は使えるのだ。ソロモンの印象は、ソロモンの霊七二人の力を借りるものだが、印象を龍因子で描くだけで発現できるため、龍因子の操作ができる者ならば、誰でも使用できる代物なのだ。しかし、その用途は広いため、素人からカルトのような上級者でも欠かす事の出来ない魔法となっている。

「捜し物をしているって言ったでしょう？それを見つけるためにさ、こいつ等の力を借りようと思ってね」

細くしなやかな指がゴエティアを突く。

「印象を描くだけじゃないの？」

「それなら話は早いんだけどね。普段、俺たちが使うソロモンの印象は、龍因子とあっちの世界にいる悪魔や天使の力を等価交換で使っているのは知っているよね？」

「うん、それはね。だから同じ印象でも、私が使うのとカルト君が使うのでは、威力が雲泥の差なのよね。それに、ソロモンの印象は印象を龍因子で描くけど、紫ちゃんが使うスペルマスターのスペ

ルは、言葉を力に変えているのよね」

「紫のスペルは、言葉に意味があって強力な力を帯びているからね。だから、長い時間を掛けて術を綴る、いや、紡がなければいけない。だから、魔法とは区別してスペルって呼ばれている。だけど、俺たちの使う魔法は、指向性のある龍因子をイメージして具現化しているだけだから、詠唱なしで発動できる。技の名前なんかを口にするのは、よりイメージを明確にするためなんだよね。ソロモンの印象は、印象を描くだけだから、どんな人物でもある一定の力を引き出す事は出来る。逆に言えば、それ以上の事は出来ない。だけど、あちら側にいる悪魔をソロモン王のように使役してその力を行使できたら、それは恐ろしく強い魔法になるし、悪魔の持つ特別な力を使つて、人の心を操つたり、知恵を得たり宝探しも出来る」

「まさか、カルト君。ソロモンの霊を使役しようって言うんじゃない？」
「そのまさかなんだよ、残念な事にね。といつても、俺はこれ以上ファミリアを持つ気はないからね。使役じゃなくて、正式な契約かな」

カルトは深々と溜息をついた。

「契約と言つても、大変なんでしょう？」

「ああ、ソロモンの霊を召喚して、倒さないといけない。書類にサインするだけだったら、楽で良いんだけどね」

「悪魔が提示する書類にサインする方が、私は嫌な気がするけど。でも、カルト君なら楽勝でしょう？いつもみたいに、『この霸王の神剣マクシミリオンは、お前の闇と悪意を断ち切る！』なんてビシツと決めれば良いんだし」

自分を守ってくれたカルトを思い出し、麟世は頬を赤く染めた。そんな麟世を見て、カルトはより深い溜息を吐き出す。

「ソロモンの霊くらい、メジャーな悪魔になると、それはもう、手に負えないくらい強い。彼らは典型的な発生発展型だからね。俺がカルト・シン・クルトの力を受け継いでいるとは言つても、所詮は人間。マクシミリオンの力だつてまだまだ引き出していないしね。」

そもそも、万物を切り裂き、果ては時間軸さえ斬れるって言うけど、実際は相手の龍因子強いとそこでマクシミリオンは弾かれちゃうからね。マクシミリオンが俺の意志に合わせて斬れる対象を選別できるって言うのは、マクシミリオンが金属と龍因子の合いの子のような存在だからなんだよ。マクシミリオンが強いって言うのは、かつてのカルトが使ったからであって、俺が使ったら持ち運びに便利に良く斬れる剣でしかないんだよ」

「と言うわけで」カルトはゴエティアの頁をパラパラと捲る。

「今回は、コイツと契約を結ぼうかと思っているんだ」

「これって、グレモリー？もっと別な、ベリアルとかアスタロトとか、そう言ったのにすれば？」

「勝てるわけじゃないでしょう……。というか、俺の実力じゃ、アイツ等を召喚しただけで息が切れちゃうよ」

「だから、グレモリーなんだ」

「他にも理由はあるよ」

カルトは唇を緩めてグレモリーの頁を見つめた。

二枚目だが、どこか人を食ったような笑顔だ。こういう場合、カルトは決まってるくなく事を考えていない。一見して無口そうな彼だが、自分の興味のある事には驚くほど饒舌になる。そして、クールだと思われているが、その実ユーモアに溢れている。ユーモアと言うよりも、子供っぽいといった方が良いか。まあ、この様な思いがけないギャップも、女性にとっては堪らない物なのだが。

「グレモリーはね、二六の悪魔の軍団を指揮する侯爵なんだ。過去・現在・未来について教え、隠れた財宝について語る。それに……」
「それに？」

「どうせ契約するなら、無骨な悪魔よりも、可愛い悪魔の方が良いでしょう？ラクダに乗ったエキゾチックな美女らしいよ」

美女という言葉に、麟世は奥歯を噛み締める。学園で一番の美女と言われている麟世。実際には、そんな事を思った事はないのだが、カルトの口から美女という言葉が出てくると、やはり対抗意識を燃

やしてしまう。それに、人間の美少女よりも、悪魔の美女を選ぶとは一体どういう事なのだろう。

「……………もう！どうなっても知らないんだからね！」

吐き捨てるように言った麟世は、カルトが手を伸ばそうとした飲みかけのコーヒーを取り上げた。

「もう閉店です！」

怒気を含んだ麟世の声に、厨房にいた店主がひょっこりと顔を覗かせた。

二章 私ってダメなニンゲンなのかしらん？

満月まで、後六日。

夕暮れ時、稲城紫は人気の少ない住宅街を歩いていた。

西の空に沈もうとしている太陽。東の空からは群青色のベールが舞い降り、蜜柑色の空を覆い隠そうとしている。まだ春先の太陽の勢力は弱く、最後の力を振り絞って放つ残光も、何処か儚い。

今日の紫は、躑躅ヶ丘女子校^{つつしがおか}の制服である、目の覚めるような青いブレザーに、同色のスカートを履いていた。胸にはG県の県花であり、高校のシンボルとなっている躑躅の校章が付いている。本来ならば、ヒヒイロカネの織り込である仕事服を身につけるべきなのだが、今は着替えに費やす時間さえ惜しかった。

私服と仕事服には大きな違いがある。それは、生地に織り込んでいる魔法金属の有無だった。第三種生命体は、発生した時から簡易結界と呼ばれる反則的な結界を纏っている。その結界は、第三種生命体が強ければ強いほど強力な結界となる。その為、人は最初から大きなハンデキャップを背負って戦う事になる。だが、龍因子の浸透性の高い魔法金属を服に織り込む事で、簡易結界を獲得する事が出来た。簡易結界を身に纏い、龍因子で肉体を強化する事により、人は漸く第三種生命体と同じ土俵に立てるのだ。

制服を身につけている紫は、簡易結界という大きな武器を一つ失った状態だ。もし、ここで第三種生命体と遭遇したら。例えば自力で勝っていたとしても、危険な勝負になる事は目に見えていた。

昨夜、第三種生命体の消えた場所を、スマートフォンの画面に映し出された地図を頼りに歩く。民家をクリックすると、別画面が表示されて住人の家族構成や職業、年収などの個人情報が表示される。もちろん、一般には出回っていないソフトで、特別に妖魔攻撃隊から支給されたものだ。こういうのを目の当たりにすると、国家権力

は侮れないと思ってしまっ。

「こう見ると、怪しい人はいないわよね」

紫は周囲を見渡すが、不穏な龍因子はもちろん、空間の綻びや結界も見あたらない。コンビニや自動販売機すら見あたらない、絵に描いたような閑静な住宅街だった。

方々歩き回ったあげく、紫が辿り着いたのは昨夜第三種生命体を見失ったあのアパートの前だった。

白魚のような細い指が、スマートフォン画面の上を滑るように動く。

「このアパートに住んでいるのは、殆どが社会人か。それで、高校生が一人……」

紫は画面に映し出されたアパートの住民の一覧を見て、気になる人物に目を留めた。人差し指がプロフィールに触れると、画面一杯にその人物の詳細なデータが示された。

「星雲雀学園の三年生。特待生でもない彼が、アパートで一人暮らし？」

星雲雀学園は、北関東一のマンモス校だった。学業とスポーツ両方に優れ、全国から特待生を招き入れている事でも有名だ。学校の敷地内には学生寮もあるため、県外などから来る生徒の大半はその学生寮で暮らしている。カルトと大地が星雲雀学園に通っているため、紫にとっては良く知った高校だ。

「火野雪路……か」

特に不思議な点は見あたらない。しかし、何故だが得心がいかない。こんな片田舎の大きいだけの学校。進学率が高いが、それでも一流の大学に入れるのは上位のほんの一握りの生徒だけ。特待生で引つ張られたなら兎も角、一般入試で一人暮らし。家庭の事情か、それとも、もつと別の理由があるのだろうか。

「火野………雪路………」

細い顎に手を当て、紫はもう一度確認するように呟いた時、突然横手から声が掛けられた。

「あの、俺に何か用ですか？」

「ヒヤアッ！」

驚いた紫は、手にしていたスマートフォンを放り投げてしまった。宙に浮いたスマートフォンを、お手玉をして漸く手中に収める。見ると、星雲雀学園の制服を身につけた青年が立っていた。

「あれ？」

どこかで見た事のある顔に、紫は小首を傾げた。

「あ、君は確か、昨日俺を助けてくれたハンターの……」

言われて、紫の脳裏に昨日助けた青年が浮かび上がった。あの時は、青い顔をして恐怖に戦っていたが、当然ながら今は至って普通だ。

「貴方が、火野雪路さん？」

「そうだけど？」

雪路の細い瞳にスツと警戒の色が宿るのを紫は見逃さなかった。

白地に青、黄、緑、黒のグレンチェックのブレザーに、清楚、清潔を象徴する白いスラックス。少し長めの黒髪は整髪料でキチンと纏めてあり、面長の顔にはきつく結ばれた唇が朱色の一文字を描いている。ルックスで言えば、中の上と言ったところか。清潔そうなところがポイントが高いが、発散する雰囲気はどこか負のオーラを纏っている。人を拒絶する眼差しが気に掛かる。

「いや、あの、特に用事はないんです。ちょっと調べ物をしていたら、偶々此処に辿り着いて」

スカートのポケットにスマートフォンを押し込む。雪路は訝しそうに紫の様子を伺う。しかし、雪路は不意に表情を緩めると、「そうだ」と手を打った。

「君、ハンターなんだろう？良かったら、俺の話を聞いてくれないか？」

雪路の態度が豹変した。紫は、一瞬戸惑った物の、グイッと近づいてきた端正な顔に、思わず頬を赤く染めた。

「話って、なんですか？」

「俺はね、第三種生命体の夢を見る事があるんだ」

「夢？」

ドクンと、紫の心臓が高鳴る。

昨夜逃げた第三種生命体と、目の前にいる火野雪路。その二つが紫の中で繋がるうとしていた。何故そう思うのか。紫自身にも分からない。楽観的な思考。余りにもタイミングが良すぎる展開に、戸惑いながらも雪路の話に耳を傾けていた。

「俺はね、昨夜、女の人が殺された映像を、この目で見ていたんだ」雪路が示したのは自分の瞳。磨かれた御影石のように真っ黒に輝く瞳には、虹色メッシュが僅かに乱れた、嬉しそうに頬を緩めた紫の顔が写り込んでいた。

セリス邸の地下には、広い訓練室が設けられていた。やけに天井が高く、ただっ広いだけの殺風景な部屋。壁も天井も、全てが白色で塗り潰された世界に、三人の人物がいた。

カルトに麟世、そしてセリス。

白い手袋の感触を確かめるように拳を握りしめたカルトは、訓練室の中央へ歩み出た。

白地に赤い裏地のマントが、照明に反射してキラキラと輝く。今日のカルトは、中世ヨーロッパの絵画の中から抜け出てきたような出で立ちだった。赤い長袖の上に青い半袖を身につけ、その上に開襟の白い長衣を身につけている。下半身にフィットするズボンも白く、膝下までのブーツを履いていた。

紫と違い、普段着としては絶対に身につけられない衣装がカルトの仕事服だった。

「いいことカルト、油断するんじゃないわよ」

セリスが声を掛けながら腕を一振りすると、部屋の中央に結界が張られた。青い光によって、カルトと外界が隔絶された。この結界の中ならば、どれだけカルトが暴れても外に影響はない。

「カルト君！頑張つて！」

麟世の声を背中に受け、カルトは小さく頷く。

緊張で口の中がカラカラに乾いていた。いつもより心臓の鼓動が早く、手足は他人から借りてきたかのように余所余所しい。グレモリーは、カルトがこれ程までに緊張を強いられる相手だった。

「ミリオン！」と叫びマクシミオンを手にしたカルトは、空を切り裂き召喚の五芒星を描き出す。二メートルを超す五芒星の中心部には、グレモリーの印象が浮かび上がっていた。描き出した印象の光が強くなる。強大な龍因子が魔方陣から発散された。

「来た………！」

カルトは唾を飲み込んだ。

凄まじい龍因子の奔流がカルトの体を突き抜ける。グレモリーの印象が消え、代わりに闇が生まれる。闇の縁からは炎が溢れ、黒い邪悪なオーラが漏れ出してくる。

纏っている簡易結界が反応する。まだ相対していないというのに、簡易結界が反応する。普通の人間ならば、この気に当てられるだけで発狂してしまうかも知れない。カルトは力強い眼差しで闇の中を睨み付けた。

闇の中から巨大な一瘤駱駝が躍り出てきた。文字通りの気炎を吐きながら、一瘤駱駝は激しく首を上下させた。駱駝の背中には、黒いシヨールを頭から体にかけてグレモリーが両足を揃えて斜めに乗っている。

シヨールの間から覗く褐色の顔は妖艶で、紫色の唇は不敵な笑みを浮かべている。不遜な瞳は真紅で、自らを呼び出したカルトを値踏みしているかのようなだった。

「カルト君！油断しないで！」

背後から麟世の心配そうな声が聞こえてくる。まあ、それも無理はないだろう。相手はあのソロモンの霊。紛れもない上級悪魔だ。

「カルト！せめて瞬殺だけは避けなさい！生きていれば私の魔法で治してあげられるから」

「負けること前提ですか……」

しかし、セリスの言う通り、グレモリーは予想していたよりも強そうだった。目の前に立つただけで凄まじい威圧感を感じるし、体から溢れ出る龍因子は今まで戦ったどの悪魔よりも強大だった。何よりも、初めて間近で見る一瘤駱駝にカルトはびびっていた。

（一瘤駱駝って、一つ目で角が生えていたっけか？）

この駱駝だけでも、カルトと良い勝負をしそうな感じた。カルトは威圧されている自分を鼓舞すると、グレモリーに負けないだけの龍因子を放った。体中の龍子が活性化し、凄まじい量の龍因子を体に漲らせる。第三種生命体を遙かに上回る龍子と龍因子を持つ、それがカルト・シン・クルトだった。

結界の中に龍因子の風が吹き荒れた。カルトとグレモリーの間に停滞している空気が圧縮される。カルトの龍因子に押され、駱駝が嘶きながら一歩後退する。

「問題ないですよ。有名なソロモンの霊と言っても、所詮はマイナー悪魔のグレモリー。たった二六の軍団しか従えていない侯爵が、そんなに危険なはずはない！」

「そんな危険なはずはないって……」

麟世は心配そうに眉間に皺を寄せる。

「どつかで聞いたわね、そのフリーズ。明らかな死亡フラグね」
セリスは溜息をつく、困ったように米神に人差し指を当てた。
「見てて下さい、先生！麟ちゃん！あのシヨールを引っぺがして、ヒーヒー言わせてやりますよ！」

「行くぜ！」と叫んだカルトは、マクシミリオンに青い雷光を纏わせると、グレモリーに飛び掛かった。

十五秒後

「クソッ！なんだってんだ……マジでいて……！」
カルトは血反吐を吐いて床に横たわっていた。

グレモリーの乗る一瘤駱駝が巨大な口を開けてカルトを噛み砕こうと迫ってくる。

カルトは寸前の所で横に転がり駱駝の顎を躲すと、堪らずグレモリーから距離を取った。

「カルト君！無理しないで！」

麟世の声援に頷く余裕すらなかった。

カルトは自分の体を確認する。とりあえず五体満足、骨折などは見あたらない。胃袋の中に血が混じり、常に吐き気がする。グレモリーの初撃で内臓の一部が深刻なダメージを受けたのだろう。左手でレイエの印象を描くと、それを体に押しつけた。傷を操るレイエは、傷口を広げたり出血を止めたりする事が出来る。カルトは、後者の力で応急処置を施した。

「チツ、どうなったんだよ。マクシミリオンは確実にグレモリーの首を風いだと思ったんだけど……。なかなかやるじゃないか……！」

口元に笑みを浮かべるカルト。そんなカルトに、「開始十五秒で倒された奴が、笑っているんじゃないの！」と師から叱咤が飛んだ。「俺は戦いながら、相手の力を計るタイプなんですよ！」

口から血の塊を吐き出しながら、カルトはセリスに返した。白い長衣が吐血により赤く染まりつつある。

カルトが斬りかかった瞬間、マクシミリオンが纏っていた魔法が？き消えてしまった。近接攻撃の為、簡易結界で阻まれたと言う事はない。しかし、マクシミリオンから魔法が消えてしまった事は確かだ。そして次の瞬間、カルトは激しい電気ショックを受けて吹き飛んでいた。

ほんの僅かな交錯の瞬間、グレモリーがわずかに手を挙げただけは理解できた。しかし、どうやってカルトがダメージを受けたのか、そこまでは確認できなかった。

動きを見せないカルトに対し、グレモリーは驚くべき早さで近づいた。いや、グレモリーを乗せた駱駝が近づいてきた。

「魔法剣・紅蓮！」

真紅の炎を纏ったマクシミリオン。

駱駝が前足で踏み潰そうとしてくるが、カルトはそれを紙一重で躲すと、翻ったマントを駱駝の頭に巻き付けた。紅蓮を帯びたマクシミリオンで、視界を失った駱駝の首を切り落とす。更に返す刀で前足二本を薙ぎ払った。マクシミリオンが切り裂いた傷口から炎が巻き起こり、駱駝に乗っているグレモリーも包み込んだ。

近接戦闘で最強と言われる魔法剣。斬りつけた相手を剣に帯びた魔法が追撃する。その効果は、受け止められたとしても発動し、回避不可能な攻撃として相手に届く。しかし、それはあくまでも実力が互角の場合。若しくは、相手に特殊な能力がない場合だ。

崩れ落ちる駱駝。炎に巻かれつつも、グレモリーはその手を振り上げてきた。いくつもの光が生まれ、そして放たれる。

「フィールド！」

龍因子を純粋なエネルギーに変化した結界は、カルトの周囲を高速で回転し攻防一体の障壁となった。グレモリーの放った光は、フィールドの上面を滑るようにして後方へ流れていく。

グレモリーが指を一つ鳴らすと、まわりついていた炎が一瞬にして消え去った。

グレモリー自身にダメージは見受けられないが、駱駝を倒せたのは大きいだろう。これで、グレモリーは地に降りて戦わなければいけない。カルトの注意を向ける相手は、二体から一体になったのだ。（長引かせればこっちが不利。だから、決める！）

カルトはグレモリーに走り寄る。距離にして数メートル、常人では視認することさえ困難なスピードで動けるカルトは、まさに光のごとき踏み込みでグレモリーの懷に飛び込んだ。グレモリーの視線がカルトに注がれる前に、マクシミリオンの二メートルを超す刃は薄い胸を貫いていた。纏っていた紅蓮が内側からグレモリーを焼き尽くす。

「獲った！」

グレモリーはカルトの早さに反応さえ出来なかった。会心の笑み

を浮かべるカルト。しかし、その笑顔も三秒と経たずに凍り付いた。炎にシヨールが巻き上げられる。シヨールの下にあった物、それは衣服でもなければ褐色の肌でもない。光さえも飲み込む闇だった。カルトはマクシミリオンを引き抜くが、帯びていた紅蓮は意志とは正反対に闇の中に吸い込まれた。

ヤバイ。直感的に感じたカルトは、追撃の二文字を頭から消し、後ろへ飛び退いた。予測通り、グレモリーは両手を広げるとその手に禍々しい炎を生み出した。それは、紛れもなくカルトが先ほど使った紅蓮だった。ただし、グレモリーによって若干パワーアップしているが。

激しい炎がカルトを飲み込むように迫る。紅蓮の炎に一条の光が走った。マクシミリオンが紅蓮を切り裂いたのだ。マクシミリオンに斬られた炎は、緑色の粒子となって拡散した。

胸に込み上げてくる吐き気を堪えつつ、カルトは切っ先をグレモリーに向けた。僅かな時間だったが、グレモリーの力は見切った。恐らく、カルトが当初設定していたよりも、若干強い程度だ。戦い方は謎だったが、それもこれで判明した。

グレモリーは相手の魔法を奪い、それを自らの魔法として使用する。だが、グレモリーの力でもっとも注意すべき点は、胸にあるあの闇。あの闇は、マクシミリオンの刃さえも飲み込んでしまったのだ。

カルトはグレモリーから僅かに視線を逸らし、セリスを伺う。彼女は、腕を組んでカルトの戦いを見物している。恐らく、彼女はカルトがどうやってグレモリーに対抗するのか見ているのだろう。助言は全く期待できない。彼女が登場する場合は、カルトがグレモリーに負けた時だけだ。

グレモリーは動く気配がない。彼女自体の攻撃力はさほど強くない。油断していなければ、カルトも此処までダメージを受ける事はなかっただろう。ならば、グレモリーはカルトが動くのを待っているのか、それとも……。

カルトがもう一つの事を考えた時、目の前でそれが起きた。切り落とし、炎で焼かれたはずの首と前足が砂になっていた。駱駝の切り口からサラサラと砂が逆流し、首と前足を形成していく。

（なるほど。コイツは鏡か。自らは殆ど動かないカウンタータイプ。だけど、一瘤駱駝は突進型か………予想外だったな）

正直言って駱駝を戦力と見ていなかった。ゴエティアには一瘤駱駝に乗って現れると書いてあっただけだ。人外魔境で生まれた一瘤駱駝もどきとは想定外。これでは、一対二で戦っているような物だ。駱駝が完全に復活する前にカルトは動いた。グレモリーの放つ閃光をかくぐり、マクシミリオンを頭に振り下ろす。しかし、グレモリーの掲げた右手がマクシミリオンを受け止めた。マクシミリオンの刃は、グレモリーの龍因子によって阻まれていた。

マクシミリオンも魔法も効かない。そうとなれば、残された方法はそれほど多くない。数ある引き出しから、カルトは最良と思われる物を選び取る。

「しょうがない………明日は学校を休むか。ただでさえ出席日数がピンチだつてのに」

全身に散らばる龍因子が、更に龍因子を発生させる。

胸に空いた闇に魔法が吸い取られ、利用される。それは、闇が別次元に繋がってはいないと言う事だ。あくまでも、あの闇はグレモリーの一部分なのだ。しかし、その容量がどれほどか、魔法を撃ちまくって確かめるのは余りにも非効率すぎる。

ならば、単純に龍因子を嵩上げし、マクシミリオンの切れ味自体を上げるほうが効率が良いし確実だ。マクシミリオンはその性質上、龍因子をどれだけ入れるかで切れ味が違ってくる。使用者の力に合わせ、常に最良の切れ味を提供してくれる。弱ければ弱いなりに、強ければ強いなりに、だ。それは、マクシミリオンの長所でもあるし、短所とも言えた。

カルトの龍子はハンターの中でも一二を争うと言われるほどの量だ。その量は、師であるセリスを遙かに上回る。しかし、その龍子

を全て動員してしまうと、確かに爆発的な力は得られるが、肉体の方が持たない。龍因子での肉体強化はドーピング。限度がある。しかし、カルトは限界を越え、肉体から龍因子の緑色のオーラが立ち上るまで高めた。

マクシミリオンが、龍因子を感じ取り力を増す。

一瘤駱駝の再生が終わった。駱駝は炎の息を吐きながら、首を激しく上下させた。駱駝が怒り狂っている、それだけは理解できた。

長時間の戦闘では、こちらが不利になるだけだ。勝負は一瞬。

「これで終わりだ……！」

カルトが駆け出すのと、グレモリーが動くのが同時だった。

龍因子を吸収し、これまで以上の力を纏ったマクシミリオンが、一瘤駱駝の吐き出す炎もろとも首を再び切り払う。そのまま、カルトは駱駝とすれ違うようにマクシミリオンを走らせる。

「消えるオ！」

グレモリーの放つ閃光が、右肩を撃ち抜いた。弾け飛ぶ血と肉で、視界が一瞬赤く染まるが、カルトは怯むことなくマクシミリオンを振り抜いた。

駱駝は上下に分離し、乗っていたグレモリーも上半身と下半身を分断された。

グレモリーから離れたカルトは、体の状況を見てゾツとした。

右肩はやバイ状況だった。全く動かないどころか、プラプラと所在もとなそうに動き、今にも千切れて落ちてしまいそうだった。痛い。で済む怪我ではないが、悲しいかな、ハンターという職業をやっている、この手の怪我には慣れてきてしまう。

マクシミリオンを左手に持ったカルトは、倒れたままこちらを見上げるグレモリーに歩み寄る。相手は第三種生命体。首を切り落とされたって時間が経てば修復されてしまうのだ。

グレモリーの様子を注意深く観察したカルトは、グレモリーに戦う意志がない事を見て取った。捲れ上がったシヨールの下には、もう闇はなかった。そこにあるのは、褐色の滑らかな肌に、控えめな

乳房。

「トドメだ」

マクシミリオンを掲げたカルトは、何の感情も示さない赤い瞳を睨み付けると、赤い瞳と瞳の間に、白銀の刃を突き立てた。

グレモリーは悲鳴も上げずに自らの敗北を認めると、砂となってこの世界から消えた。

「……………それって、本当なんですか？」

八畳一間のアパート。畳張りの部屋は小綺麗に整理されており、紫が抱いていた男子高校生の一人暮らしの部屋とは様子が違っていた。

東の壁には大きな本棚が置いてあり、そこには様々な本が並べられていた。見ると、マンガなどは一切無い。紫とは無縁の小難しい小説や辞典ばかりだ。昨日、大切そうに抱きかかえていた本も並んでいた。南側に吐き出しの窓があり、西の壁には小さな筆筒が一棹。その横には布団が畳まれていた。

青年、火野雪路はカラになったコップにコーヒーを注いだ。

リビングと続いている台所には、小さな食器棚と冷蔵庫が一つ並んでいる。シンクには洗い物など置いておらず、使用した形跡は見あたらない。恐らく、外食がメインなのだろう。

「何人もの人が第三種生命体に殺された。俺は、その映像を見てきた。この近くにいるんだろう？」

雪路の声は震えていた。どこか、落ち着きがないのは、第三種生命体が恐ろしいからだろうか、それとも、紫が正面にいるからなのだろうか。ハンターでもこれだけ可愛い女子高生と狭い部屋にいるのだ、緊張しない方がおかしいのかも知れない。

紫はクスリと笑うが、すぐに口持ちを引き締めると、一つ神妙に頷く。

「ええ、この辺りに潜伏していると思います」

普段のように間延びした口調ではない。ハンターとして、少しは威厳のあるところを見せておかなければいけない。

「それで」と繋いだ紫は、コーヒで喉を湿らせると話を続けた。「貴方の話してくれた内容を、是非とも詳しく聞きたいわ」

「何を聞きたいんです？」

「もつと詳しく聞きたいの。第三種生命体の容姿とか、どうやってターゲットを見つけているのかとか」

小さな丸テーブルに身を乗り出す紫。日も陰り、暗くなった室内に虹色のメッシュがキラキラと輝いてる。

「そんな事を言われても」

雪路は口籠もる。綺麗に整えられた眉が、困ったようにへの字になる。紫の表情とは対照的に、雪所の表情は曇っている。彼は、自分の持つ能力に困惑しているのだろうか。

紫の熱い視線に負けたかのように顔を背ける。雪路は立ち上がると、南の掃き出し窓に近づいた。カラカラと乾いた音を立て、窓が開けられる。

雪路の背中を、紫は黙って見つめた。

冷たい風が室内に流れ込んでくる。

微かな音を立て紫の髪が流れる。

春風に花の香りが漂っていた。

小さな声で、雪路は答えた。

「アイツの姿は、昨日、初めて見た。ミラーに映っていたんだ、アイツの体が」

紫は目を細め、雪路の声に耳を欹てる。

「姿形は……、マントを身につけていた……いや、翼か。暗くてよく分からないけど、翼が背中にあった。そして、細くて長い手足。顔は小さくて、ワニや蛇などの爬虫類に似ていて、瞳のない赤い目を爛々と輝かせていた」

所々言葉を止めながら、雪路は記憶の中から第三種生命体の映像を思い浮かべているようだ。

「他に、何か特徴は？何でも良いわよ、手がかりになるような物なら、些細な事でも」

紫は立ち上がる。雪路の元へ向かおうとした時、雪路がスツと体を室内に戻した。振り返る彼の顔は影になりよく見えないが、彼が酷く驚いているのが分かった。

「最近……、不審な人物を見かける事がある」

「不審な人物？」

紫は掃き出し窓から外を見る。

すでに夕日が落ちた空には、星がきらめいている。満月になりきれない中途半端な月が、ポツンと浮かんでいた。

月明かりが落ちる住宅街に、不審な人物は見受けられない。

「ここ数日、不審な人間がいる。何度か見た事があるんだけど、すぐにどこかに行ってしまうんだよ」

雪路の言葉に、紫は頷いた。

紫は自分の連絡先を雪路に教えると、アパートを後にした。

セリス邸に戻り、現在の進行状況を報告しなければいけない。それに、雪路の話を聞いてもらい、意見を仰ぎたかった。

「せんせ~~~~！カルト~~~~？だいちい~~~~！」

人気のないセリス邸を一通り見て回った紫は、リビングのテーブルに置かれたカレンダーを見て「あつ、そっか」と納得した。確か、カルトがソロモンの霊と契約をすと言っていた。皆は、地下の訓練室にいるのだろう。

「カルトの奴、ボコボコにされてれば面白いのに」

クスクスと笑いながら、紫は訓練室へ向かった。

訓練室に入った紫は、思わず入口で立ち尽くしてしまった。目の前には、一瘤駱駝に乗ったエキゾチックな美女。セリスとも隣世とも違う、絵の中から抜け出したような容姿。人の持つそれとは違う、さめざめとした美しさだった。駱駝の足元に輝く印象を見て、それ

がグレモリーだと分かった。

「あら、紫、帰ってきたのね？」

結界の外に立っていたセリスが、紫に気づいた。

「うん……、カルトは？」

結界の中に居るグレモリーからは、気配は疎か微かな龍因子さえ感じられない。セリスの張った青い結界が、すべてをシャットアウトしているのだろう。しかし、グレモリーが放つ威圧感は凄まじい物で、これが結界の外にいたならば、恐らく一歩も動く事は出来ないだろう。それほどの実力の差を、紫は一目で実感した。

「カルト君なら無事よ」

「ふーん、勝ったんだ」

紫は麟世の横に立つと、グレモリーの前に立つカルトを見た。普段は怪我一つ負わないカルト。すでに傷は癒されているようだったが、白い仕事着には赤い血がベツトリと付いている。やはり、カルトといえど一筋縄ではいかなかったようだ。

ざまあみろと思う反面、また差が開いてしまったと拳を握りしめる。対抗しているわけではないが、目標との差が開いていくばかりでは、やはり面白くない。

次々と仕事をこなし、そして強くなっていく兄弟子。それに比べ、自分は三度依頼に失敗している。セリスのお仕置きは確かに怖い、それ以上に失敗した時の事が怖い。紫が失敗すると言う事は、誰かが死ぬという事なのだから。

「紫ちゃん、仕事は順調？」

麟世の問いかけに、紫は眉尻を下げた。紫が失敗する度にメールをくれたり、アルルーナで愚痴を聞いてくれる麟世。まだ付き合いは浅いが、いつしか紫にとって麟世は姉のような頼れる存在になっていた。

「麟世姉様……。順調……とは言えないわよ」

「大丈夫。いつもの訓練みたいにならば、きっと成功するわよ」

紫の言葉に麟世は微笑む。この木漏れ日のような優しい笑顔に、

紫は何度も救われてきた。恐らく、カルトの心もこの笑顔によって救われたのだろう。

「さあ、カルト、グレモリーに聞きたい事を尋ねなさい」

セリスの言葉に、紫と麟世はカルトに注目する。

カルトは、やや緊張した面持ちでグレモリーに近づいた。もし、契約が失敗していたなら、この瞬間にカルトの首が飛んでもおかしくはない。

グレモリーは涼しい眼差しでカルトを見下ろしている。どうやら、グレモリーにカルトを攻撃する意志はないようだ。

「何なりと……」

グレモリーが口を開いた。口から発せられたのは、キーキーとした甲高い奇声。しかし、言葉は頭の中に直接響いてくる。頭の中を掻き回されるような、不快な感覚に紫は顔をしかめた。隣にいる麟世も、苦しそうに唇を噛み締め、目を細めている。

「グレモリー、お前に尋ねたい事がある」

カルトはそう切り出すと、チラリとセリスを見た。カルトの眼差しを受け、セリスは頷いた。

「『妖術の暴露』、それが最近出回って困っている。写本の在処を知っているか？ それを持っている人物でも良い」

カルトの問いに、グレモリーは小さく首を傾げた。そして、ゆっくりとその顔がこちらに向けられた。グレモリーの視線の先にいる人物、それは麟世ではなく紫だ。

「……………」

グレモリーの静かな眼差しを受けた紫は、知らずの内に一步後退していた。

「貴方の望む物は、すぐ近くにあります」

グレモリーはそれだけを言うと、何の前触れもなくフツと虚空に消えた。グレモリーの消失と共に、光っていたソロモンの印象も力を失い消えていった。

暫く、グレモリーが消えていった場所を見つめていたカルトは、

長い溜息を一つつくと、ポリポリと頭を掻きながらこちらへ来た。

「どう？何か分かったかしら？」

面白そうに口を綻ばせたセリスが問いかける。博識強記、そして慧眼の士であるセリスは、グレモリーの答えともヒントとも取れる言葉だけで全てを理解したようだった。

「うゝん…………、近く、近くねゝ」

カルトは紫の頭をポンポンと叩く。

「ちよつとおゝ！あたしは妖術の暴露なんて本知らないわよ！それに、その手の本なら、隣の書庫にあるんじゃないの？」

紫は荒々しくカルトの手を払い除けた。もしかすると、カルトも先ほどの言葉である程度の事は把握したのかも知れない。しかし、紫には分からない。カルトがどんな経緯で妖術の暴露を探しているかも知らないのだ。分かるわけがない。

「それとは別の物が出回ってるんだよ。この近辺でね」
肩を竦めたカルトは、「シャワー浴びてきます」とセリスに告げる。

「どうぞお先に！でね、先生、さっき面白い人に会ったんだけど、少し相談に乗ってくれないかしら？」

セリスが口を開くよりも先に、紫の背中にカルトの言葉が投げかけられた。

「紫、折角だ、俺も相談に乗ってやるよ。シャワー浴びるまで待つてろ」

「はあゝっ？なんでアンタがそこで出てくるのよ！これは私の仕事なんだからね！」

訓練室から出ようとしているカルトの背中に叫んだ。

「お前の仕事でも、失敗したら俺と大地まで罰を受けるんだよ！だから、アドバイスクらいしてやるって言っただよ」

ヒラヒラと手を振ったカルトは、訓練室から出て行った。

「もっ！カルトったらお節介なんだから！」

ドンツと床を踏みならした紫に、麟世は「カルト君は紫ちゃんが

心配なのよ」と、諭すように囁いた。

紫は昼間起きた出来事を話し終えると、中天に浮かぶ月を見上げた。

「すると、紫は火野雪路先輩の話が本当かどうか、知りたいって事か？」

「そうなのよね。話が上手すぎると思わない？」

セリス邸のサロンには、紫、カルト、麟世、セリスの四人が好きな場所に座ってくつろいでいた。

紫は床に置いたビーズクッションに体を埋め、ガラス張りの天井から望む星空を見上げている。カルトと麟世は木製のロッキングチェアに腰を下ろし、ユラリユラリと揺れている。セリスは一人掛けのソファーに座り、優雅にお茶を飲んでいた。

「まあ、その話、乗ってみるのも悪くないかもね」

「やっぱり、先生もそう思う？」

紫は首を後ろに倒すようにしてセリスを見る。反転した視界の中で、セリスは口元に笑みを浮かべた。視界の隅では、難しい表情を浮かべているカルトがいるが、最初からカルトの話を聞くつもりは毛頭無い。そもそも、セリスのお仕置きが待っているからと言って、カルトがしゃしゃり出てくるのはおかしいのだ。兄弟子なら兄弟子らしく、どっしり構えて罰を受ければいいのだ。

「カルト君はどう思うの？」

浮かかない表情を浮かべるカルトを気遣ってか、麟世が尋ねる。余計な事と思ったが、麟世にそんな事を言うわけにもいかない。紫は小さく舌打ちしながらも、カルトをジロリと睨み付ける。兄弟子は口元に手を当てると、確認するようにセリスを伺い、麟世、そして紫へと目を向ける。

「話が見てこない……………」

呟くカルトに、紫は体を反転させる。逆さまに写っていたカルト

が元の位置に戻った。

「見えてこないって？ 私には分かったわよ。火野先輩が第三種生命体の夢を見るんでしょう？ 彼の見た映像は、最近市内で起こっている事件とほぼ一致する。火野先輩が第三種生命体と何らかの関わりがあるのは確かなんじゃないかな？ 話を聞いた限り、私たちの味方だとは思っけど」

「そ〜そ〜、麟世姉様の言う通りよ！ 火野さんはいい人よ」

「うん。誠実そうな人よね」

そこまで言って、麟世はハツと口を噤んだ。

「ん？ 麟ちゃん、火野先輩を知っているの？ もしかして、学校じゃ有名な人？」

「あ、ええ……。いや、そんなに目立つ人じゃないかな……。でも、私は知ってるのよ。あの、ほら、親友の恵が前に振られたのよ。私も、その時一所に居たから憶えてるの」

乾いた笑いをした麟世は、紫とカルトの視線から逃れるように、ギイツとロツキングチェアを大きく揺らした。

カルトは「ふ〜ん」と答えただけで、たいした興味を抱いていないようだ。「興味がなければ聞くんじゃないわよ」と、紫は一人口た。

「だけどき、紫。やっぱりハッキリしないんだよな。なんて言うのかな、話の大筋は分かるんだけど、何かしつくりと来ないんだ。何がしつくりと来ないのか、分からないんだけどさ。例えるなら、メチャメチャ濃いラーメンを食べても、何味だか分からない。そんな感じだ」

「ラーメン？ カルト、そんなラーメンあるわけ無いでしょう？」

「あるんだよ、それが。今度連れてってやるよ。ちなみに、俺は酢と醤油を入れまくって食べたけどな」

「もういいわよ。突然ラーメンの話なんか出してきて。ホント、訳分らないわアンタ」

紫はビーズクッションから体を起こす。

「兎に角、私はこれから張り込みをするわよ！今度こそ、絶対に第三種生命体を逃がさないんだから！それに、火野さんがいついた不審人物って言うのも気になるし」

「一人で平気か？」

「だあゝかあゝらあゝ！今回、カルトの出番は無いつていつてるでしょう？カルトの出番は、グレモリーを倒して終了なの！後は私の出番よ」

紫はセリス邸にある自室に戻ると、制服から仕事着に着替え、夜の街へと飛び出した。

三章 あたし、告白されるの初めてなんですけど！

三章 あたし、告白されるの初めてなんですけど！

ここは何処だ？

こいつは夢か？

雪路は困惑した。

初めて見る景色。

初めて嗅ぐ匂い。

全てが違っていた。

命の息吹があった。

命の調和があった。

命の連鎖があった。

全てが揃っていた。

完璧な世界だった。

後は破壊するだけだ。

殺し、喰らい、犯す。

漸く辿り着いた世界。

ここは、楽園だった。

空には美しい満月が輝いていた。大きな、とても大きな満月。太陽の光を全身に受けて反射する姿は、自ら光り輝く太陽よりも優しい光を投げかけてくれる。

楽園は、一瞬の気の緩みで地獄へと変化した。

俯瞰した視線で、雪路は第三種生命体、悪魔を見下ろしていた。

雪路の胸には言い知れぬ焦燥感が生じている。見ているだけではなく、雪路の深層心理が悪魔とシンクロしているのか。

悪魔には翼が映えていた。体毛は少ない。爬虫類のようにゴツゴツとした皮膚は鈍色に輝いており、見るからに頑強そうだ。背丈は、

横に並ぶ民家のブロック塀よりも頭一つ高い。

悪魔が辿った道には、黒い血痕が点々と続いていた。

複数の気配が迫っているのを雪路は感じ取った。先日感じた気配とは違う、小さな気配だ。しかし、その小さな気配にこの悪魔が傷を付けられたことを雪路は知っていた。

一対一では負けはしないが、複数で取り囲まれてしまつては流石に分が悪かった。致命傷を負った悪魔は、這々の体で追っ手を巻いた。だが、それも束の間。悪魔が流す血痕と、すでに気配を消すことさえ困難な体が、相手に自らの位置を教えていた。

こいつはもう終わりだ。本当は、この悪魔はここで消えるはずだった。なのに、コイツは消えなかった。

一軒の民家に悪魔は入っていった。寝静まつた住宅街。数ある民家の中で、悪魔は偶々その一軒を選んだ。何故そこが選ばれたのか、明確な理由などありはしないだろう。ただ、悪魔の体力が付き欠けた時、そこにあった。ただ、それだけだった。

裕福でもなければ、貧乏でもない。どこにでもある中流階級の家。こじんまりとした一軒家だ。最後の力を振り絞り、玄関をすり抜けた悪魔。雪路はその後を追おうとした。しかし、雪路は悪魔の後を追うことが出来なかった。雪路は、玄関の脇に掛けられた表札を見つめていた。

「止める……………」

気がつくと、雪路は叫んでいた。

「止める！」

ドアをすり抜けた雪路は悪魔の後を追った。雪路は血痕を追って二階へと向かった。床や壁には悪魔の流した黒い血液で汚れていた。採光窓から差し込む月光が、白い壁に付着した血痕をグロテスクな絵画のように引き立てていた。

雪路が向かった先は寝室だった。そこに寝ているのは、三十前の夫婦と、生後数ヶ月の赤ん坊のはずだった。

「ああ……………」

雪路は愕然とした。すでに遅かった。

寝室は血に染まっていた。壁、床、天井、窓にもベツトリと血が飛び散っていた。

悪魔の進入に気がつかなかった夫婦は、悪魔に惨殺された。喰らうわけでもなく、ただ、そこにいたから殺された。そして、夫婦の横に眠る子供。彼は、生暖かな血を浴びて嘔び泣いていた。

大きな声で泣き叫ぶ赤ん坊。もう、いくら泣いても彼の両親はやしてはくれない。この世界に一人残された子供。彼のこれから歩む道を、雪路は誰よりも良く知っていた。

「これは、俺だ……、この赤ん坊は、俺だ……」
気がつくと、雪路は泣いていた。

彼の足元には、力尽きた悪魔が横たわっていた。

いつの間に寝ていたのだろう。部屋は暗く、掃き出し窓からは未成熟な月が弱々しい光を室内に忍び込ませていた。

嫌な夢を見た。あの夢を見るのは久しぶりだった。

雪路は涙を拭った。あの夢を見た後は必ず涙を流している。写真でしか見たことのない両親。何一つ憶えていないはずなのに、夢の中で死んだ両親を何度も見る皮肉。

第三種生命体の夢を見るからか、それとも、稲城紫と会ったからか。

雪路はベランダに出ると、空を見上げた。もう少しで満月だ。両親が死んだ夜も満月だった。

満月まで、後五日といったところか。

暫くベランダで月を眺めていた雪路は、気配を感じて視線を下げた。民家の影に、サツと誰かが隠れた。一瞬、心臓を掴まれたかのように体が硬直した。雪路は慌てて部屋に戻った。掃き出し窓の鍵

を閉め、カーテンを閉める。暗くなった室内。カーテンの隙間から差し込む光が、本棚を照らしていた。雪路は本棚を見つめると、小さく舌打ちをした。

もう、余り時間は残されていないのかも知れない。

「見つけた……！」

雪路の住むアパートの周辺を張っていた紫は、雪路が指摘したとおり、不審な人物を発見した。

雪路がベランダに出た時、民家の影に生じていた闇が動いた。今までは気配を消されていて分からなかったが、雪路の出現に合わせて、僅かな気配を生じさせた。ほんの微かな気配。その気配は、小動物のように小さな物だったが、紫が探知するには十分すぎた。

紫の動きに気がついたのか、それとも、雪路に気がつかれたからなのか、その人物は闇に紛れるように逃げ出した。

トレンチコートの裾を靡かせて紫は駆けた。

「逃がさないわよ！」

紫と対象の距離はドンドン縮まっていく。紫が角を曲がった時、その人物はすぐ手前の脇道に入った。後数秒で追いつける。角を曲がった瞬間、突然生じた気配に腕を掴まれた。

「ッ！」

咄嗟に紫は拳を突き出していた。しかし、その人物は紫の拳を軽々といなすと、口を押さえて足を払ってきた。

押さえ込まれそうになる紫は、払われた足を振り上げて相手の後頭部を狙った。しかし、紫の動きを読んでいたかのように、その人物は振り上げた足をもう一本の手で払い除けた。

「おい！俺だ！」

アスファルトに転がった紫は、闇からひょっこりと顔を覗かせた人物を見て「あっ！」と素っ頓狂な声を出してしまった。月光の下に現れた人物、それはカルトだった。

「カルト、どうして此処に？って、いま怪しい奴がいたの！追わなきゃ！」

「怪しい奴？」

カルトは自分が来た道を振り返った。真っ直ぐに伸びる道に、人影は疎か猫の子一匹見あたらない。頬をポリポリと掻きながら、「そんな奴は見かけなかったけど」とカルトは答えた。

「えっ？だって、さっきそこを曲がったのに……！」

まさか、カルトがあの人物か？一瞬、紫の脳裏にそんな考えが浮かんだ。紫の依頼を心配したカルトが、見に来たのかも知れない。しかし、だとしたら逃げる必要はない。それに、カルトが逃げたとしたら、紫が追いつけるはずはない。

「それよりも何だよ、その格好」

手を差し伸べてきたカルト。温かい手を握ると、グイッと体が冷えたアスファルトから引き上げられた。

「何を言ってるのよ。だって、張り込みって言ったら、カーキ色のトレンチコートにハンチング、それに」

紫はクイクイツとサングラスを中指で押し上げた。

「サングラスでしょう」

「怪しい人物って、お前の事じゃないよな？」

ヤレヤレといった感じでカルトは呟く。

「それよりも、腹減ったろ。ホレ、差し入れ」

カルトはコンビニの袋に入ったお弁当を掲げて見せた。時刻は午前二時を回ろうとしている。夕食を摂っていない紫の体は、エネルギーを欲していた。

「ああー！お弁当だー」

喜ぶ紫。その時、紫の下腹部で大きな腹時計が鳴った。

「あ……、あんパンが空っぱの胃袋に浸みるわ」

「で、火野先輩の様子はどう？」

カルトは弁当を突きながら尋ねる。

「どうって？別に普通よ？私は火野さんをマークしてるわけじゃないしね」

キイツと錆び付いたブランコを鳴らして紫は答える。

深夜を回った人気のない公園。どこの住宅街にもある小さな公園だ。公園を囲むように植えられた桜の木は、今は八分咲きと言ったところだ。月光に照らされた桜の花は蒼く、氷のように冷たい雰囲気を見る者に与えた。

この公園の遊具はブランコとシーソー、園内の片隅に砂場があるだけ。昼間になれば近所の子供達で賑わうのだろうが、夜はポツンとライトが一つ、物寂しく灯っている。

この公園から北に見える住宅がある。その裏側に、雪路の住むアパートがある。紫はそちらの方を見やった。

雪路の言ったとおり、怪しい人物はいた。またしても取り逃がしてしまっただが、それでも収穫はあった。相手は第三種生命体ではなく人間だ。となれば、あの人間が第三種生命体を使役しているのだろうか。

この間、紫が取り逃がした第三種生命体。あれは確かに忽然と消えたが。召喚をした第三種生命体だとすれば、それも可能だ。しかし、妖魔攻撃隊もセリスも、相手は人間ではなく、潜伏成長型の第三種生命体だと言っていた。紫も、相手の気配や動きを感じた時、間違いなく敵は自我を持っていて動いていると感じていた。

「うゝん、話が食い違ってくるわね」

カルトの言っていた通り、ハッキリしない、スッキリしない。隣に座る兄弟子は、一体どのように考えているのだろうか。紫は牛乳を口を含みながら横を見た。そして、牛乳を吹き出してしまった。

「ちよつとおゝゝゝ！」

「ん？」

温かいお茶を飲みながら、カルトは仁王立ちした紫を見上げる。

「ん？じゃないわよ！なんでアンタが特性デミグラスハンバーク

弁当で、私があんパンとパック牛乳なのよ！普通、逆でしょう、逆うゝゝ！しかも、あたしがハンバーグ好きだって知っていてワザと買ってきたでしょう？」

「だって、お前は格好から入るタイプだろう？張り込みの定番と言えば、あんパンと牛乳じゃないか」

「うつ……………！それとこれとは話が別よ！あたしは成長期なのよ！もし、これ以上胸が大きくならなかつたら、一生恨むんだからね！」

叫んだ紫は、カルトの手からお弁当と箸を取り上げると、食べかけのあんパンをカルトの口に押し込んだ。

「ったく！人が折角親切で見に来てやつたつてのに」

「だからあゝ、問題ないわよ」。明日学校なんだから、早く帰って寝たら？明日も補習なんでしょう？」

「そうだけどさ……………」

紫は大口を開けてハンバーグを押し込む。甘いデミグラスソースが口の中に広がる。ゆっくり味わって咀嚼し、ゴクリと飲み込む。温かいお茶を飲んでホッと息をつく、疲労と襲ってきた眠気が吹き飛ばすようだ。

「はあゝゝゝ、生き返るわゝ」

だらりと脱力した紫。瞳を閉じ、緩やかな風に身を任せる。足から浮かせると、キーツと微かな音を立ててブランコが揺れる。

感覚を研ぎ澄ませると、風に揺れる小さな桜の花びらの動きさえ感じ取れるようだ。感じ取れる生物の動きは、横に居るカルトだけ周囲に住む人達は皆眠りについており、ペットの犬や猫も丸くなって寝ている。

静かな街。今日は第三種生命体も出ないのではないか。そう思った矢先、静かな湖面のように凪いでいた感覚に、不協和音とも言える波紋が広がった。

昨夜感じた第三種生命体と全く同じ気配。現れた場所も、すぐ近く、雪路の住むアパートの近くだ。

「出た！」

立ち上がった紫は、手にしたお弁当をカルトに渡す。

「あたしが行くからね！カルトは手出ししないで帰って寝てて！」
「分かってるよ」

ヒラヒラと手を振るカルト。どうやら、カルトは首を突っ込む意志はないようだ。いや、今日のカルトはグレモリーと戦い龍因子の殆どを使い切ってしまったのだろう。動きたくても動けないのだ。

紫は纏っていたトレンチコートとハンチングをカーディナルに変化させる。トレンチコートの下からは、いつもの仕事着が現れた。

敵との距離はほんの数メートル。紫は気配を消しながら目標へ向かっていった。

「頑張れよ、紫」

紫が公園を出て程なくして、カルトの気配が公園から動いたのが分かったが、それ以上、彼の気配を追わなかった。紫の意識は、街に解き放たれた第三種生命体だけを追っていた。

第三種生命体は紫の存在に気がつかず、飛ぶようにして深夜の住宅街を走った。紫は気配を消しながら第三種生命体の後を追う。ヘタに攻撃を仕掛けて、ここで取り逃がしてしまったら元も子もない。第三種生命体は、屋根の上に立つと動きを止めて周囲を見渡した。
(やばあゝ……！見つかったかしら？)

羽衣状にしていたカーディナルを手元を集めると、それを長銃に変化させる。距離にして五十メートルと言ったところ。若干距離はあるが、命中させれば大ダメージを与えることが出来る。本来ならば、カーディナルではなくスペルを使いたいところだったが、ここで声を張り上げるわけにもいかないだろう。

(スペルマスターって厄介よね)。相手が殺る気なら問題ないけど、相手が逃げようとする、途端に使えない技能になるわね)

息を詰め、カーディナルの切っ先を第三種生命体へ向ける。

雪路が言ったとおり、第三種生命体は背中にマントのような翼を

背負っていたが、飛ぶ事は出来ないようだ。手足は長く、指にはナイフのように鋭い爪が伸びている。細身でひよろりとした体。その体から発せられる龍因子は、第三種生命体独特の邪悪さと臭気を持ち合わせていた。

（この感じ、聖霊でも妖魔でも妖怪でもない、妖魔ね……………）

ブルブルと背中の中を振るわせる妖魔。妖魔はキョロキョロと周囲を見渡すと、こちらを向いた。

少しずつカーディナルに溜めていた龍因子。もし、相手がこちらに気づいた素振りを一瞬でも見せたなら、龍因子の弾丸を放つしかない。

壁の影に隠れた紫は、ゴクリと唾を飲み込んだ。ピリピリとした緊張感が住宅街に漂っていた。恐らく、妖魔はこちらの気配を感じ取っていないとも、周囲に流れる緊張感や殺気を感じているのだろう。紫は気配を消すことが出来ても、先走る感情を制御するには、まだまだ未熟だった。

その時、フツと妖魔の姿が消えた。屋根の上から降りたのだ。逸る気持ちを抑え、小さな体に押さえ込み、紫は後を追う。

キヤアアアーーーー！

女性の悲鳴が静寂を切り裂いた。相手は、どうやら獲物を見つけたようだ。そして、紫も獲物を捕らえたときの中でガッツポーズをした。

妖魔の消えた家の裏に回ると、若い女性が路上に倒れていた。妖魔は、腕を振り上げて女性の前に立っている。

妖魔は目の前の女性に気を取られており、背後に紫が現れたことに気がついていなかった。振り上げた腕に向け、カーディナルに溜めた龍因子を放つ。音もなく、緑色の閃光が闇を切り裂いた。小さな炸裂音と共に、妖魔の右腕が宙に舞った。

「それ以上は！」

悪魔が紫の存在に気がついた。しかし、すでに時は遅かった。カーディナルで龍因子の弾丸を放った紫は、すぐに地を蹴り悪魔との距離を縮めていた。

体重と突撃の速度を乗せたカーディナルが、悪魔の胸板を貫く。確かな手応え。しかし、右手を失い、更に胸を貫かれてなお悪魔は抵抗を見せた。

振り上げた左腕が紫の顔面目掛けて振り下ろされる。

紫は僅かに頭を下げると、悪魔の攻撃をやり過ごした。手にしていたカーディナルを破棄し、右半身を半歩後ろに下げる。

「フルフル！」

左腕を素早く走らせ、中空にソロモンの印象を描き出す。ソロモンの霊の一人、フルフルの印象が虚空に輝いた直後、印象から火球が発生し悪魔の体に炸裂した。

爆風と爆音が狭い路地に広がり、逃げ場のない衝撃波が周囲の壁を粉微塵に粉碎した。

紫の足元には女性が倒れていた。水商売でもしているのだろう。

高そうなブランド物のスーツにバック、ファンデーションと香水の強い香りが周囲に漂っている。紫の纏う簡易結界で大半の爆風を相殺したとはいえ、女性の髪は若干焼け焦げ、服もボロボロになってしまった。とはいえ、悪魔に襲われて死ぬよりは遙かにマシだろう。

気を失っている女性をそのままに、紫は悠然と悪魔に歩み寄る。

悪魔の体に突き刺したカーディナルは、先ほどの爆発で悪魔の体から落ちていた。紫が爪先でカーディナルに触れると、カーディナルは長銃から一枚の白い布へと変化し、フワリと宙に浮かび腕に巻き付いた。

「フフ、どうよカルト！これであたしも一人前よ。まあ、派手には決められなかったけど、それは次の機会って事で」

左腕に龍因子を集中させる。掲げた左腕から、緑色のオーラが立ち上った。

「雷陣晶」

紫のイメージを汲み取り、溢れ出る龍因子が白い結晶へと変化した。左腕に生じた冷氣の塊は、凄まじい早さで紫の周囲を白く染め上げていく。軋みを上げながらアスファルトが凍り、空気中の水分が凍てつきサラサラと粉になって落ちてく。

瓦礫の中に悪魔は倒れていた。小さな顔には、赤く輝く狡猾そうな瞳。逆三角形の小さな頭は、カマキリなどの昆虫を連想させる。体は硬い鱗に覆われていたが、肩から背中にかけて長い毛で覆われている。失った右腕はすでに再生を始めており、あと少しで元に戻ってしまうだろう。

「さ、終わりよ」

紫は触れる物全てを凍らせる電陣晶を、悪魔に向けて放った。

これで、紫の初めての仕事は無事に終わる。カルトや大地にも、胸を張って自分がハンターと言う事が出来る。少しばかり道路と民家を破壊してしまったが、まずまずの成果だろう。百点満点とはいかないだろうが、セリスから及第点はもらえるはずだ。

電陣晶が悪魔に着弾した。この一撃で、全てが終わるはずだった。しかし、悪魔は背景の瓦礫に溶け込むようにして消えていった。呆気にとられる紫だが、すぐに気配を追った。どんなトリックを使ったのか分からないが、悪魔は壁の崩れた民家の裏手から逃げているようだった。

「チッ」

紫は崩れた壁から庭に入ると、そのまま突っ切った。途中、何かと箒を持って顔を出した住人に、「危険だから家の中へ！壁の修理費用は妖魔攻撃隊に言ってね！」と叫んだ。

（なんで？どうして？魔法は疎か、龍因子さえ使っていないかった。予め結界や魔方阵、護符の類を持っていたわけでもない）

だが、実際に悪魔は逃げた。忽然と空間に溶け込むようにして逃げてしまった。疑問符が頭の中を乱舞するが、紫の体は反射的に動いていた。考えるのは後回し。今は逃げた悪魔を追いかける方が先決だ。手負いの悪魔は焦っている。もし、民家の中にも入られて

しまつたら、それこそ一大事だ。

「クソッ、マズったわ〜！」

口では暢気にぼやきながらも、表情は真剣そのものだった。壁を一つ、二つ飛び越えた紫は、片側一車線の道路へと出た。此処を北に向かえば、雪路の住むアパートだ。悪魔は、先日消えた場所に帰ろうとしているのだろうか。

道の中央に悪魔がいた。こちらを振り向きもせず、一心不乱に逃がっている。

（今度こそ！逃がすものですか！）

カーディナルを巨大な鎌に変化させた紫は、龍因子で肉体を強化し一瞬にして悪魔との距離を縮めた。月光を受けて冷たく輝く大鎌の黒い刃が、悪魔の無防備な首筋に向けて振り下ろされた。

チラリと、悪魔がこちらを振り返った。逆三角形の小さな頭部、そこに付いているのは、何の感情も宿さない赤い瞳ではなく、意志のある瞳だった。その輝きは、人の持つそれとよく似ていた。

紫の脳裏に光のように何かが走り抜けた。しかし、紫がその原因を理解するよりも早く、カーディナルは悪魔の首を風いでいた。いや、先ほどまで悪魔のいた空間を風いでいた。

再び、悪魔の姿は紫の前から忽然と消え去った。

啞然とする紫。気配を探ってみるが、周囲に悪魔の気配は感じられない。昨日と同じように、悪魔は消えてしまった。

「……………」

虹色メツシュの髪をクシャクシャにした紫は、暫くその場に留まっていた。龍因子を周囲に放ち気配を探ったところで、やはり悪魔の居場所を特定することは出来ない。恐らく、龍因子を消してどこかに身を潜めているか、ここから遠くに逃げてしまったのだろう。

一つ溜息をついた紫は、フラフラと覚束ない足取りで歩道まで歩むと、街灯に背を預けた。

「もう、どうなってるのよ……………」

この状況では、紫でなくとも文句を言いたくなるだろう。相手の

戦闘力は紫よりも遙かに劣る。なのに、どうしても捕らえることが出来ない。捕らえたと思った瞬間には、相手は煙のように消えてしまふ。握った手から、煙のようにすり抜けてしまふ。

龍因子の強弱が絶対的な戦闘力の差にはならない。セリスは常日頃口にしていた。最初は、龍因子さえ強ければ負けることはないと思っていた。だが、実戦を体験してみても、言葉の意味を思い知った。負けはしないが、勝つことも出来ないのだ。今回のように、相手が龍因子の余韻すら残さず消えてしまう場合は、力よりも頭を使わなければいけないのだ。

空を見上げる紫。

冷たい風が髪を揺らした。

紫の頭には、最後に見た悪魔の目が浮かんでいた。汚れなく澄み、どこか寂しそうな瞳は、どこかで見た事のある瞳だった。だが、いくら考えても何処で見たのかが思い出せない。

遠くでパトカーのサイレンの音が聞こえてきた。

あれほどの騒ぎを起こしたのだ。近隣の住民が通報したのだろう。紫は街灯から背を離れた。警察に説明をする必要がある。もしかすると、妖魔攻撃隊も一緒に来ているかも知れない。

大鎌を赤いニット帽に変えた紫は、現場に戻ろうと足を動かそうとしたが、その一步を踏み出すことはなかった。微かな気配を感じた。遠くない、すぐ近くに人の気配を感じる。この気配は、一時間ほど前に逃がした気配と酷似していた。

気配を消した紫は、そつと壁の影から覗いてみる。すると、雪路の住むアパートの前に、一人の人物が立っていた。気配を消し、物陰に隠れる人物。気配の消し方や身のこなしから、素人ではないことは一目瞭然だった。

紫はそつと動くと、気配も足音もなく一陣の風のように背後に立った。

「死にたくなければ指先一つ動かさないで、何も話さないで」
相手の首筋にそつと手を当てた。もし、僅かでも不審な動きをし

たら、この手で首をへし折ることぐらいは容易い。紫の殺気に満ちた気配を敏感に感じ取ったのだろ。その人物は忠告通り、身動き一つしない。

「両手を挙げて、ゆっくりとこちらを向きなさい」

紫の言葉に、その人物はゆっくりと両手を挙げるとこちらを向いた。

月明かりに照らされるその顔を見た時、紫は「あつ」と小さく言葉を発してしまった。

そこには、見覚えのある顔がバツの悪い笑顔を浮かべていた。

欠けていた月も、徐々にその姿を真円に近づけていた。数日前までは星明かりに負けていた月光も、今は星明かりを凌ぐ輝きを放っていた。

満月まで後四日。

喫茶店アルルーナは盛況だった。会社帰りの社会人や、塾や部活帰りの学生で賑わっていた。落ち着きを取り戻したのは、夜の九時を少し回った時分だった。

カルトと大地は十時前にアルルーナを訪れると、いつものカウンター席に腰を下ろした。

「いらつしゃい、何にする？」

人もまばらな店内のテーブルを拭いて回りながら、麟世は二人の注文を取る。

「ボクはコーヒーフロートにミートソーススパゲティ」

「俺はピザトーストにマンダリン。マーマレードは多めで、コアントローは少なくして」

「はい」

麟世は注文を厨房にいる店主兼シェフに伝える。スパゲティとピ

ザは店主に任せ、麟世はドリンク作りに取りかかる。

大地の注文したコーヒーフロートの説明はあえて必要ないだろう。カルトの注文したマングリンとは、アレンジした紅茶だ。スリランカのキャンディ地方で取れるくせの少ない茶葉を使用し、マーマレードジャムと、柑橘系の香りが特徴のコアントローと呼ばれるリキユールを入れた物だ。コアントローの香りと、マーマレードジャムの爽やかな甘みが特徴のアレンジティーだ。

二人の前にそれぞれの品を置いた麟世。

目の前に座るクラスメイト二人は、水曜日だというのに一様に疲れた表情を浮かべていた。特に、カルトの方は店内に入ってきてから三回は大きな欠伸をしていた。学校でも、朝からカルトはぐったりと机に突っ伏し、授業中の大半を夢の中に過ごしているようだった。

学校では寝ているくせに、アルルーナに来ては小難しい本を読んでいる始末だ。この情熱を、もう少し勉強の方に活かせない物だろうかと、常々麟世は思っていた。大地は大地で、アルバイトの女の子の揺れるミニスカートの裾をずっと目で追っている。一度注意をしたが、「ボクがそんなイヤらしい事するわけ無いだろう？麟世の考えすぎだよ」と、真っ向から否定していた。否定はしていたが、やはり大地の視線は女の子の下半身や胸元に注がれている。無意識でやっている分、治すのは骨が折れるだろう。

咳払いをして大地の注意をこちらに向けた麟世は、欠伸を噛み殺して本を読んでいるカルトに尋ねた。

「昨日、遅かったの？」

「……………うん。少し、紫の様子を見てきたからね」

「紫ちゃん、どうだった？」

「また逃がしたみたい。まあ、相手はちょっとクセのある奴みたいだからね。ちよっと手間取るんじゃないかな」

「で、お前の方は分かったのか？」

大地の問いにカルトは頷くと、読んでいた本から目を上げた。余

程眠いのだろう、その目は赤くなっていた。

「俺の方はとりあえず解決したよ。後は、紫にお任せだな」

「へー、グレモリーが役に立ったみたいだな。ボクも、何か契約してみるかな」

「ニヤハハ」と笑う大地。

「ま、便利って言えば便利だけど」と前置きをして、カルトはマシダリンを一口啜る。

「その便利は命と天秤に掛けるほどの価値があるかどうか、よく考えろよ」

「うつ……！それを言われると……。確か、異性の気を惹くソロモンの霊もいたじゃん？やっぱり、止めた方がイイかな？」

「そんな理由じゃ、契約の際に先生は付き合ってくれないだろう。」

一人でやると、間違いなく逝けるぞ。正直、俺も逝けそうだった」

「だよな。逝けるといつても、そっちの逝くは、まだいいや……」

しみじみと呟いた大地。その時、ドアのベルを小さく鳴らして紫が入ってきた。紫は、カウンターにいる麟世を見るとパツと表情を明るくしたが、その向かい座るカルトと大地見ると、ガツクリと肩を落とした。

「なんだ、二人とも早めに帰ったと思ったら、ここに来てたの……？」

紫はそう呟きながら、カルトの横に腰を下ろした。

「麟世姉様、あま……いココアを頂戴」

いつもの元気がない紫は、まるで萎れてしまった花のように見ていて辛くなる。少しでも元気が出るようにと、麟世は飛びきり甘いココアをいれた。

紫はココアのカップを両手で包むように持つと、フーフと息を吐いて少し口に含んだ。少し落ち着いたのだろう。紫のお尻に付いているゼブラカラーの尻尾がピヨコンと跳ね上がった。

「あら？紫ちゃんその尻尾は？」

麟世の指摘に、カルトと大地も紫の尻尾に気がついたようだ。

最近流行りのファーストラップにしては、出来が精巧すぎる。麟世もいくつか持っているが、このようにピョコピョコ動く物は持っていない。いや、そもそも動くような代物ではないのだ。

「なんだこれ？」

そう言つて、無造作にカルトが掴む。

「あんっ……！」

ピクリと体を震わせた紫は、僅かに顔を上気させる。初めて聞く紫の艶っぽい声に、こちらの顔が赤くなってしまった。

「は？お前、なんて声出してんだよ、気持ちワリーな」

「ちよつと！勝手に触つておいて失礼なこと言わないでよね！これはね、カーディナルなの！だから、あたしと直接繋がっているのよ！もう！」

そう言つて、紫はゼブラカラーの尻尾を、リスのようにクルクルと丸めた。前々から思っていたが、カーディナルとは何と汎用性の高いマジックアイテムなのだろう。

（いいな、アレがあれば、色々なコードが出来るじゃない）

麟世の羨ましそうな視線には気づかず、紫は片肘を突くとカルトと大地を睨め上げた。

「ねえ、あんた達さ………」

いつもと違う口調に、二人は「ん？」と紫を見る。

丁度、店主が二人に注文の料理を持ってきた。いつもと違う雰囲気を感じた店主は、愛想笑いを浮かべただけで料理を置いて足早に去っていった。アルルーナの店主も、三人とは浅からぬ仲なのだ。僅かな空気の違いで、どのような問題が起こっているのか分かったのかも知れない。ちなみに、麟世には皆目見当が付かない。

「あたしの仕事の結果こうなるって、いつから分かっていたわけ」
強い非難の色を滲ませる端的すぎる言葉。しかし、彼女の兄弟子二人は顔色一つ変えない。

「ボクは、ついさっき。数分前」

「俺は、昨日グレモリーからヒントをもらった時に、大体予測は出

来ていたよ」

「……………そう」

深々と溜息を吐き出した紫は頂垂れた。サラサラと、虹色メッシュを差したバルーンボブの髪が揺れる。

「あたしが……………何も分かっていなかったって訳ね」

呟くように放たれた言葉。それは、カルト達を非難しているようにも取れるし、自分の未熟さに腹を立てているようにも思える。恐らく、その両方なのだろう。

状況を飲み込めない麟世だったが、紫が抱えている問題がどれほど深刻なのか、目の前に座る三人の表情を見れば一目瞭然だ。麟世が口を出して良い状況ではないことは、バカでも分かる。

「で？」

クルクルとパスタをフォークに絡めた大地は、美味しそうに口に運ぶ。

「どうする？俺が代わろうか？」

タバスコをピザトーストに掛けたカルトは、紫を見つめた。秋空のように澄み切った眼差しからは、何の感情も読み取れない。

紫は頂垂れたまま顔を上げない。カルトの言葉に、否定もしない。今までの紫なら考えられない事だ。昨日までは、あれほど自分で依頼を達成することに固執していたのに。

暫くの逡巡の後、紫は首を横に振った。

「いい。自分でやるわ。だって、あたしはハンターですもの。そうでしょう？」

顔を上げた紫。その顔には、無理していると一目で分かる作り笑いが浮かんでいた。

「そうだな。頑張れよ、紫」

「うん」

カルトの言葉に素直に頷いた紫は、ヒョイツと手を伸ばすとカルトが手にしたピザトーストを取り上げた。まだ冷めないココアをグイッと一飲みし、トーストを口に押し込んだ。

「じゃ、あたし行くわ」

「今日も張り込みか？」

大地の問いに紫は、「もう張り込みは止めたの」と携帯電話を振る。その仕草を見たカルトは、小さく笑った。

「日下部さん、褒めてたぞ。気配も足音も消さず、背後を獲ったってな」

「あー！日下部のオジさん、やっぱりカルトに報告したんだ！もう、恥ずかしいから言わないでってあれほど言ったのに。あゝ……もう、間違いとはいえ、妖魔攻撃隊の隊員を脅したなんて、ホント、恥ずかしいわ。でもま、日下部さんのおかげで、あたしにも事件の全貌が見えたんだから、良しとするしかないわよね」

そうばやいた紫は「じゃ、支払い宜しく」と、カルトと大地の背中を叩くと、こちらに手を振って出て行ってしまった。

日下部と言う、聞いたことのない名前が出てきた。そして、事件の全貌が分かったとも。麟世の知らないところで、事件は急展開を迎えたようだ。事件が解決したら、カルトにでも話を聞いてみよう。

雪路は目を覚ました。

酷く喉が渴いていた。

ここ数日食欲もない。

喉だけは渴いていた。

畳の上に敷いたせんべい布団から体を起こした雪路は、テーブルの上に置かれていたコップを手に取ると、中に入っていた水を飲み干した。

ホツと一息ついた雪路だったが、まだ体には激しい倦怠感が残っていた。

今日、雪路は学校を休んだ。目が覚めた時、体が思い通りに動かなかったのだ。高い熱が出て、体の節々が痛んだ。夢で見た第三種

生命体の映像がそうさせたのか、胸と右腕が激しく痛んだ。

雪路はカーテンから漏れ出す月光に右手を晒してみる。冷たい月光の中に浮かび上がる右手は、確かにそこにあった。

女子高生ハンターの稲城紫。第三種生命体の目を通してみる彼女は、身も竦むほどの殺気を纏っていた。そして、容赦ない攻撃は第三種生命体を、雪路を激しく打ちのめした。

自分はどうかしてしまったのだろうか。頭を振り、殺風景な部屋を見渡す。ここに住み始めて二年が経過していたが、家具らしい家具もない。高校生の男としては、余りにも整いすぎた部屋。静かな部屋を見渡した雪路は、本棚に目を留めた。唯一の趣味である読書僅かばかりの蔵書を収めた小さな本棚。一番下の棚に僅かに隙間があった。確か、昨日までそのような隙間は無かったはずだ。

雪路は小さな舌打ちをした。胸の奥に僅かばかりの緊張が宿る。手を伸ばし、本棚を確認する。やはり、本の数が足りない。

まだ熱を帯びている頭では、いつ本が盗まれたのか考えることが出来ない。今日は一日寝ていた。昨日寝る時も、本棚に変化はなかったはずだ。

その時、カンカンカンツと外で足音が聞こえた。誰かが階段を上ってくる音だ。

雪路は起き上がった。そして、ドアへ歩み寄る。鍵を開けてドアノブを掴むのと、呼び鈴が鳴らされたのはほぼ同じだった。

「コンバンワ」

立っていたのは、稲城紫だった。ニコリと微笑む彼女。しかし、その顔は何処か強ばっていた。紫は一度深呼吸をして小さな肩を下させると、意を決めたように強い口調で言葉を発した。

「あたしは今日、雪路さんを殺しに来ました」

不思議なことに、その言葉に大したショックは受けなかった。ただ一つ、今までの人生を振り返ってみて、ろくな事がなかったな、と思っただけだった。良い思い出も無ければ、悪い思い出もない。印象に残ったことを思い出そうとしても、何も思い浮かばない。そ

んなつまらない人生を送ってきた。

雪路は幼さの残る少女を見つめた。いつの間にか、少女の手には小さなナイフが握られていた。彼女の力ならば、雪路が瞬きするほどの一瞬でナイフを心臓に突き立てることが可能だろう。

「何か、言い残す事はありませんか？」

紫の大きな瞳が不安定に揺れている。特徴的な虹色メッシュの髪が、月明かりに照らされてキラキラと輝いている。月光の中に佇む彼女は、とても魅力的だった。

「あ、一つだけ……………」

雪路は呟いた。

紫は小さく頷く。

「俺と、付き合ってくれ」

「……………は？」

雪路の言葉に、紫が呆氣にとられたのは、当然と言えば当然のことだった。

「死ぬまでの数日間が良いんだ、俺と付き合ってくれ」

「付き合ってって、近所のお買い物とかじゃないわよね？」

「ああ、彼氏彼女として。恥ずかしいけど、俺は今まで一度も女性と付き合ったことがないんだ。死ぬ前に、どんな気持ちなのか味わってみたい。ダメかな？」

紫の手に使っていたナイフが力をなくすと、一枚の布へと変化した。

「あつ、いやつ、あの、その……………！」

桜色に頬を染め、しどろもどろになった紫。紫は暫く手を振ったり、首を横に振っていたが、雪路の真剣な眼差しに押されたのか、急にシユンとしてしまった。唇を噛み、暫しの沈黙。そして、細く長い息を吐き出しながら紫は顔を上げた。

「……………分かりました。三日間だけ……………」

紫は月を見上げた。紫の瞳に、僅かに欠けた月が写り込んでいた。「次の満月まで」

ぺこりと紫は頭を下げた。

「不束者ですが、よろしく願います」

「あ、いえ、こちらこそ、宜しく」

紫に習い、雪路もぺこりと頭を下げた。

あと三日で死ぬという事よりも、こんなに可愛い彼女が出来たと言う事の方が、雪路にとっては重大なニュースだった。

四章 好きになったらどうしよう??

星雲雀学園の屋上には、麗らかな春の日差しが降り注いでいる。

甘い花の香りを受けて流れる風に前髪を揺らしながら、カルトはベンチに腰を下ろしミサンガを編んでいた。

カルトの右手には、焼きそばパンをコーヒ―牛乳で流し込む大地が座り、左手では麟世が手元を覗き込んでいる。

「ねえ、カルト君。それ、ミサンガでしょう?」

白魚のように細く滑らかな指先には、赤、青、白、黒、黄色の糸が複雑に絡まりあっていた。日差しを受けて輝く糸は、恐らく魔法金属の一種だろう。テンポのずれた鼻歌を奏でながら、カルトは龍因子を注ぎ込みながら器用にミサンガを織り込んでいく。

「そっだよ」

「で? 誰にあげるの?」

淡い期待を胸に麟世は尋ねてみる。今までカルトからプレゼントらしいプレゼントを麟世はもらったことはない。まあ、彼氏彼女の間ではないから、当然と言えば当然かも知れないが。先月のホワイトデーのお返しも、近所のデパートで購入した飴の詰め合わせだった。もらえるだけで満足。そう思っていた麟世だったのだが、カルトは同じ物をセリスと紫、そしてアルルーナの店主にもプレゼントしていたのだ。

（あれ、明らかに、義理よね……………）

正直言って、ショックを受けた。直接カルトの口から聞いたわけではないが、カルトにとって、麟世はその他大勢の友人の一人と言う事なのだろうか。こう見えても、麟世は先輩後輩、同級生からひっきりなしに告白される。去年の年末に行われたミスコンでも、強豪を抑えて優勝した。間接的とはいえ、麟世がこれ程までにアプローチを掛けているというのに、それらしい素振り一つ見せないの

は、女としての沽券、プライドに関わる。

「もしかして、私にくれるとか？」

日常会話での些細な一言。だが、麟世にとっては、自分の気持ちをそれとなく伝えられる一言。大地は麟世の言葉の真意を敏感に感じ取ったのか、笑いを堪えてカルトを見ている。

「ん……………」

カルトは小首を傾げながら、黙々とミサングを編み上げている。

「いや、麟ちゃんのじゃない。これは、他の人のだよ」

ミサングを編み上げたカルトは、それを大地に手渡す。大地は「ブツ」と吹き出しながらも、麟世を見ないようにしてミサングを握りしめた。笑っているのだろっ、大地の肩が小刻みに上下している。麟世は唇を尖らせて、カルトに詰め寄る。一体、魔法金属で作られているミサングを誰にあげるといっののだろうか。

「これはね、火野先輩のだ」

カルトは分厚い眼鏡をこちらに向けた。

「火野…先輩の……………」

学校にいる時は、カルトは分厚い眼鏡を掛け前髪を庇のように下ろしている。眼鏡を外した素顔は息を飲むほど美しいというのに、カルトは素顔を学校の皆に晒すことを極力嫌っていた。もっとも、麟世としてはこうして素顔を隠してくれていた方が、おかしな虫が付かず安心だ。

「そ、火野先輩の力を押さえる。その術式を」

カルトは大地の手元に目をやる。

「ボクが入れる。とは言っても、押さえられるのは三日間だけだとな」

クルクルと指先で回したミサングを、大地はカルトに渡す。ほんの数秒で、大地はミサングに強力な結界を組み込んでいた。ゾツとするほど強力な封印式。それが、姿を隠すようにミサングの中に溶け込んでいく。

「三日間……………」

カルト達は、何を言っているのだろうか。断片的な情報しか得られない麟世には、意味が分からない。

「麟ちゃん知らないんだっけね」

「ん、紫ちゃんが火野先輩と付き合うことになったって言うのは、昨日本人からの電話で知ったけど？」

それとミサンガ、三日間というワードが、どんな関係があるのだろうか。

「火野雪路、アイツは悪魔だ」

大地が吐き捨てるように言った。

「は？火野先輩が、悪魔？」

「嘘でしょう？」と呟くように言った麟世だが、カルトと大地の険しい表情が真実だと物語っていた。

「だって火野先輩は……、悪魔の夢を見るって……、紫ちゃんに協力していたはずじゃ……」

上手く言葉が纏まらない。去年の夏、麟世は雪路から告白された。もちろん、麟世は断ったが、その雪路が悪魔だったとは。ハンターとしての心得がある麟世は、全く気がついていなかった。

「まあ、驚くのも無理はない。実際、ボクだって気がつかなかったんだからな。この学校には、幾重にも結界が張ってあるんだけど、その全てを素通りし、尚かつボクとカルトに気配は疎かその存在自体を悟らせない。潜伏成長型だとしても、かなり隠れるのが上手い相手だ」

「隠れている、と言うのは少し違うかもね」

大地の言葉尻をとらえ、カルトが付け加える。

「潜伏成長型の悪魔は、外見と気配を人に似せて生活しているけど、火野先輩は違う。火野先輩は、紛れもなく人間だ。ただ、その体の中に悪魔が潜んでいる。俺たちは悪魔の龍因子を感じ取ってその存在を知るけど、今回のケースは違うんだ」

「違っつて、どういう事？」

大地から受け取ったミサンガを確かめるように、カルトは指先で

そつと撫でる。

「火野先輩は火野先輩の人格があつて、悪魔には悪魔の人格がある。一つの体に、二つの魂が共存しているんだよ。だから、火野先輩が表に出ている時は、悪魔の気配は一切感じない」

「でも、カルト君、どうして今になって火野先輩が……。市内で起きている事件だつて、つい最近のことなんでしょう?」

「……………そうだね。まあ、どんな過去や理由があろうとも、火野先輩の命はあと三日。三日後に、紫が火野先輩を殺す。そうすれば、事件は解決だよ」

「あと三日つて……。だつて、紫ちゃんは……………」

麟世は絶句した。カルトの言っていることが理解できない。雪路は紫の彼氏ではないのか。紫は、三日後に彼を殺す事を知つてなお、恋人同士になつたのだろうか。

「麟ちゃん、落ち着いて。その事については二人とも了承済みだよ」
「だつて……だつて……!」

「麟世、この件は、ボク達が口出しする事じゃないんだよ」

大地だ。珍しく真剣な眼差しで、射るようにこちらを見つめてくる。気がつくと、麟世は立ち上がっていた。握りしめていた拳のやりどころがなく、ただ、淡々と話しているカルトを見下ろすことしかできなかった。

言葉に出来ない激しい感情のうねりが胸を覆い尽くす。二人は、自分が何を言っているか理解できているのだろうか。紫が、一体どんな気持ちで雪路と付き合つたと思つているのだろうか。昨日、電話口の紫は本当に幸せそうだった。話を聞くだけで微笑んでしまうほど、紫は幸せで一杯だった。そんな紫を、二人は知っているのだろうか。

たまに、カルトと大地のことが分からなくなる。セリスの命令を無視してまで人を助けることもあるが、目の前で死にそんな人を見捨てる冷酷さも見せる。彼らの判断基準が、価値観が麟世とは違ふのだ。

ふと中空に目をやったカルトは、つと目を細める。分厚い眼鏡の奥に見える瞳は、深い憂いを秘めている。彼は、麟世には言えない何かを隠している。麟世は直感的に感じ取った。

「さて！」

カルトは、場に立ち籠め始めた暗い空気を払拭するかのよう膝を叩いて立ち上がると、こちらにミサンガを差し出してきた。

「麟ちゃん、お願いがあるんだけどさ、これを火野先輩に渡してくれないかな？」

「え、私が？」

両手を突き出し、プルプルと麟世は首を横に振る。この場では言えないが、麟世は一度雪路を振っているのだ。今更どんな顔でミサンガを渡せと言うのだろう。

「ムリ！無理よ、絶対にムリ！」

「絶対につて……、たかがミサンガを渡すだけだよ？あつ……、麟ちゃんは大地と付き合っていることになってるんだっけ？」

「えっ！あの噂、まだ現在進行中なの？」
「たく、人の噂も七十五日
つていうけど、もう半年近く経っているのよ」

麟世はムツとした表情で大地を睨み付ける。「なんだよ、ボクのせいじゃないだろうが」と、大地は小声で反論する。

「彼氏がいるんじゃ、流石に渡しづらいか」

「だから、アレは噂だって。カルト君も人をからかうのが好きよね」

麟世の言葉に、カルトは「アハハハ」と軽快な笑いを飛ばす。彼が笑うだけで、今まで胸の奥に渦巻いていた黒い感情が流されてしまふから不思議だ。

「じゃあ、大地。宜しく」と、カルトは大地にミサンガを渡す。

「ボクで良いのか？」

「俺が渡すよりは良いだろう？お前なら、麟ちゃんと同じく、この学校で知らない奴はいないし」

「まあ、顔は知られているけどな。まあいいや、これも兄弟子の勤めだろう。じゃ、二人とも行こうぜ」

ウインクする大地に伴われ、麟世は一階にある三年生の教室へ向かった。

「これ、ミサंगा」

「これを、俺に？」

雪路は目を丸くした。当然と言えば、当然だろう。

星雲雀学園一の不良と思われる草薙大地が、学園一の美女をともない、火野雪路を廊下に呼び出したのだ。大地から一歩下がった位置にいる麟世は、こちらに視線を投げかけてくる雪路に、引きつった笑みを浮かべて小さく手を振った。

「どうして、これを？白河さんじゃなく、草薙君が俺に？」

雪路は目の前に立つ三人に交互に視線を送った。一度告白した麟世に、他の二人よりも若干長い視線を送ったが、麟世は気の利いた台詞一つ言えなかった。此处にいるのは、カルトに大地、それに、三年生が興味津々と言った感じで大地と雪路のやり取りを見守っていた。

誰も雪路が悪魔だとは気づいていないし、後三日間の命だとは夢にも思っていないだろう。それに、雪路が麟世に告白したことを知っている人は、麟世の親友二人だけだ。紫のことを考えれば、ヘタに口を滑らせて、カルトと大地に雪路を振ったことを知られる必要も無いだろう。

麟世の打てる最善の策。それは、人畜無害な笑みを浮かべることだけだった。

雪路は、大地が差し出すミサंगाを不思議そうに見下ろしていた。「そうだよ。ボクが火野先輩にあげることが、そんなに不思議？」

「ああ、大分不思議だと思うが」

「えーっと、これは、その、なんて言うのかな……」

「うーん」と唸りながら、いつの間にか雪路と大地を中心にすると周囲を囲っているギャラリーに目を転じた。大地の視線を受けたギ

ヤラリーは、皆一様に視線を逸らし、アリの子を散らすようにどこかへ行った。

恐らく、この場でどう説明して良いのか大地も迷っているのだろう。もしかすると、彼は何も言わなくても、雪路がミサンガを受け取ってくれるとも思っていたのかも知れない。

「それは、貴方が貴方であるためのミサンガです」

漸くカルトが口を開いた。

凜と響く声が雪路の注意を引いた。今まで、大地と麟世の後ろに影のように隠れていたカルトに、スポットが当たった。

「俺が、俺でいるための？」

雪路の表情にサツと警戒の色が宿る。

カルトは大地の手からミサンガを取ると、雪路の左手首にミサンガを縛り始めた。

「そうです。三日間だけです、貴方を火野雪路にすることが出来ます」

「君は……、いや、草薙君に白河さんも、一体、何者なんだ？」

「稲城紫の」

カルトはミサンガの端と端を結った。これで、雪路の手首にミサンガは固定された。

「兄、とでも言えば納得してくれますかね？」

「あつ……」

一歩離れたカルトを、雪路は凝視した。麟世からはカルトの背中しか見えないが、一体、カルトはどんな表情を浮かべているのだろうか。

「いいですか、そのミサンガは絶対に外さないで下さい。分かりましたね？」

拒否することの出来ない、底冷えのするカルトの声だった。雪路は、カルトの気に押されたように半歩後ろに下がると、コクリと一つ頷いた。

緩やかな斜面を暖かな風が登ってくる。空には綿飴のような薄雲が掛かっており、所々オレンジ色に染まった空を望めた。

夕日に染まる街を、紫は雪路の横に立って見つめていた。

「これが、俺が住んでいた街か」

「そうよ、雪路は、見るの初めて？」

「ああ、自分が住んでいる街なんて、こんな機会でもない限り改めて見ようとも思わないしな」

雪路の言葉に、紫は寂しそうに笑みを浮かべる。

「この街には、本当に沢山の命が息づいているんだな」

「ええ、そうよ。それを、あたし達が守っているの」

「まだまだ半人前だけだね」と、紫は付け足す。

「俺がいなくなっても、頑張ってくれよな」

「……………うん」

昨夜、紫は雪路を助ける方法を考えた。しかし、いくら考えても良い解決方法は見つからなかった。たぶん、セリスに聞いても、カルトに聞いても、大地に聞いても答えは変わらないだろう。

雪路の体には、火野雪路の魂と、悪魔の魂が息づいている。仮に、雪路が悪魔に乗り移られているというのなら、解決方法はいくらでもある。それこそ、カルトのマクシミリオンで斬り払うとか、大地の呪符を用いるとか、紫でも方法は思いつく。しかし、今回は違う。雪路と悪魔の魂はイコールなのだ。

悪魔を殺せば、雪路は死ぬ。逆に、雪路を殺しても悪魔は死ぬのだ。

畢竟、紫は雪路を本当の意味で助けることを諦めたのだ。

「そんな顔をしないでくれよ。俺は、特に後悔はしていない。むしろ、最後の最後で、こうして生きている実感を得られただけで、十分なんだ」

手すりに身を預けながら、雪路は目を細める。

寂しさや悲しさなど微塵も感じられない雪路の横顔を見て、紫の

胸は苦しくなった。

雪路は、今までどのような人生を歩んできたのだろうか。終わりを前にして、どうしてここまで達観した表情を浮かべていられるのだろうか。この三日間が、彼が生きてきた今までの時間と、等しいかそれ以上の価値があるのだろうか。

紫の心情を読み取ったかのように、ポツリと雪路は語り出した。自分に言い聞かせるかの如く静かな口調は、神を前にして懺悔をしているかのようなだった。

「俺がさ、両親を殺したんだ。最初はさ、夢の中で良くその映像を見て、悪魔が両親を殺したって思っていた。だけど、本当は違ったんだ。あの時、本当の俺は殺されていた。火野雪路という男の子はあそこで死んで、悪魔が、俺があの子の中に入ったんだ」
「どうして、そんな事を？」

第三種生命体が人の中に入り込むというのは良くある話だ。しかし、死体の中に入り込み、人として生きる第三種生命体の話は聞いたことがない。成りすましはあるが、人になりきるなどあり得ないまして、雪路の中にいる悪魔は、『火野雪路』という全く別の人格を生み出し、今まで人として生きてきたのだ。恐らく、今までは悪魔は外に出てこなかったのだろう。だから、雪路は自分が悪魔だとは気がつかず、悪魔が起こした行動を、夢だと思っていたのだ。

「あいつは、怪我を負っていた。この世界に萌え出てきたアイツは、女性を犯し、人を殺した。だけど、妖魔攻撃隊に追われたんだ。妖魔攻撃隊の執拗な追撃を受けて、瀕死だったんだ」

雪路は一端言葉を止めた。きつく結んだ口。握りしめた拳。紫は、雪路の拳に自分の手を添えた。温かい雪路の手だ。これが、人ではなく悪魔だとは、到底思えない。

「アイツは、火野雪路の両親を殺し、子供も殺した。自分が入るには、子供の意識、魂が邪魔だったんだろう。悪魔は自らの肉体を捨て、魂を子供の中に入れた。だけど、子供の体が悪魔の魂に耐えられるはずもない。だから、悪魔は自らの意識を断ち、もう一つの人

格を作りだした。成長して悪魔の魂を受け入れ、肉体を変異させるまでの時間を稼ぐために」

雪路の言う魂とは、龍因子のことだ。限りなく流動的で指向性のある龍因子は、時としてその人物の記憶は疎か人格さえも宿すことが出来る。一見すると眉唾物だが、そこから目撃される幽霊が良い例だろう。

古代龍人の王の力を引き継ぐとされるカルトは、体の中にカルト・シン・クルトの記憶と人格を宿しているとセリスから聞いたことがある。もつとも、カルトの場合は良い具合に共生が出来ているため、何も問題はないようだが。

「人として生きているつもりでも、俺は少し違ったのかも知れない。どんなに人に好かれようと思っても、みんな俺の回りからいなくなってしまう。俺は小さい頃から友達が少なくてさ。いつも一人だった。誰からも相手にされないんだ」

雪路は、左手の指で右手首に巻いてあるミサンガを弄んだ。

「でも、今になってその理由が分かった。みんな、俺が違うことを分かっていたんだ。外見を似せても、気配を似せても、やはり悪魔は悪魔なんだ。みんな敏感に俺の違いを嗅ぎ取って、離れていったらろう」

「だから、俺はずっと一人だったんだ」唇を噛み締め、雪路は目を細めた。静かな高台には、風が下草を揺らす音だけが響いている。「でも、今は違うでしょう？」

今の雪路は一人ではない。紫がここにいる。自分が横にいる。カルト達に言わせれば、要らない情けだと言われるだろう。それどころか、逃亡の恐れがあると言いかも知れない。だが、紫は自分の判断に自信を持っていた。間違っていたとは思っていない。

第三種生命体を倒すのがハンターの使命だ。しかし、人を救うこともハンターの使命だと紫は思っている。ならば、紫は雪路を助ける必要がある。馬鹿げているとか、無駄な事と言われようが、やらなければならない。

「悲しいことは言わないで。一人だなんて、思わないで」

紫が真っ直ぐな眼差しを向けると、雪路は悲しそうに微笑みながら、小さく頷いてくれた。

「そうだね。今は紫がこうしている。本当に、嬉しいよ。俺は一人じゃない。そう思えるだけで、十分なんだ」

雪路は左手首に巻き付けられたミサンガを指先で弄んだ。カラフルな紐で作られた、何の変哲もないミサンガだ。

紫の視線に気がついたのだろう。雪路は左手をポケットに突っ込むと「紫に兄弟はいるの？」と尋ねた。雪路は紫から、夕闇に溶け込み始めた街並みへ目を向けた。

「兄弟？」

「ううん。いないわ」と紫は答えてから、雪路と同じ方向を向く。こうして雪路と同じ物を感じ取ることが出来る。紫は幸せだった。雪路も同じように思ってくれているのなら、紫は嬉しい。

「でも、兄弟と呼べる人は二人いるわ。一人はちよつと無愛想だけど、格好良くても奥手でね、自分の気持ちを上手く口にすることが出来ないの。まあ、それを端から見てるのが面白いんだけどね。もう一人は、本当に手がつけれない程バカでね。でも、気さくでいつもあたし達を笑わしてくれるの。普段はホントーに頼りにならないんだけどね、いざって時は、結構頼りになるのよね」

「へえ、いいお兄さんなんだね」

「まあ、何だかんだ言って、あたしはあの二人が大好きなの。あつ、大好きって言っても、男女関係の好きとかじゃなくてね。本当に家族としてって意味。あゝ、これは他言無用ね！こんな事アイツ等に聞かれたら、あたし一生バカにされちゃうから！そもそも、あの二人はあたしの事なんて何とも思っていないでしょうしね。ただの五月蠅い美少女程度にしか思っていないのよ、きつと！」

ツンツと唇を尖らせた紫。そんな姿を見て、雪路は笑った。雪路は声を出して笑った。

「なに？あたし、おかしいこと言っただかしら？」

「いいや、紫を見ていると、俺まで幸せになってくるよ。心が温まるよ」

「え？そ、そう……？」

紫は照れくさそうに頬を描くと、恥ずかしさを紛らわすように足元の小石を蹴り飛ばした。

「今晚、電話して良いかな？」

「うん、もちろん。いつでもOKよ」

紫の答えに満足そうに微笑んだ雪路は、紫の手を取ると「じゃ、帰ろうか」と言っただけでゆっくりと歩き出した。手を引かれる紫は、静かに雪路の横に体を寄せた。その時の紫の表情は、いつも見せるハツラツとした少女の顔ではなく、恋を知った女性の顔だった。

パチパチと小枝が炎の中で爆ぜる。巻き起こる熱風により、灰が空高く螺旋を描きながら吹き上げられていく。

フフフフフ……

クスクス……

炎の回りを、ファタ達が笑いながら飛び回る。

「おい、邪魔だからどっかいけよ。火傷しても知らないぞ」

フフフフフ……

キャハハハ……

小さな体に小さな胸。羽衣のような薄衣を纏ったファタは、カルトにじゃれつくように周囲を飛び回っていた。

いくら細やかに作られたフィギュアでも、此処までは再現出来ない

いだろうと思われる美しい造形。全長三十センチほどの大きさのフアタは、トンボを思わせる透明な羽を小刻みに振るわせながら、光の軌跡を残して空を飛んでいた。

カルトは手にしたプリントに一瞥をくると、それを燃えさかる炎の中に投げ入れた。一枚、二枚と手にしたプリントを次々と燃やしていく。

「庭で何をやっているのかと思ったら」

背中にかけられた声に、カルトは「ちゃんと後始末はしますよ」

と答えると、手にしたプリントを再び火にくべだした。

「家庭ゴミを燃やしちゃいけないって知ってるでしょう？」

カルトの横に立ったセリスは、気まずそうな表情を浮かべて広い庭の向こうに見える隣家を見た。

「そういうの、気にする人ですっけ？」

「ご近所付き合いっていうのは大切なよ。全く、昨今の日本人は、隣に誰が住んでいるのかさえ知らないんだから。信じられないわよ」

「付き合いが無くてても生きていける便利な世の中になりましたからね。お金さえあれば、人と会話せずとも、家から一步も出ないで暮らしていけますよ」

「生活は豊かになっても、心は貧しくなっていくのよ。心を豊かにすることが、難しいのよ」

セリスの言葉に、カルトは小さく肩を竦めた。そして、手にしたプリントの束を、一気に火の中に投げ入れた。ボツと火の粉を巻き上げながら、炎が一段と高く燃え上がる。突然燃えさかった炎に、フアタは歓喜とも悲鳴とも付かない声を上げてどこかへ飛んで行ってしまった。

広大なセリス邸の庭を守護する悪戯好きな妖精がいなくなり、場は一気に静まりかえった。パチパチと木が爆ぜる音が時折聞こえるだけだ。

カルトは手にした棒で火を突きながら、小枝をくべた。

炎に焼かれていくプリント。熱によりインクが瞬時に蒸発し、最

後には炎に浸食されて灰になっていく。カルトは炎をボンヤリと見つめながら、ポツリと独り言のように呟いた。

「紫、放って置いて良いんですか？ やっぱ俺がいきましようか？」

「これはあの子の仕事よ。カルトの仕事じゃないわ」

「ですけど、アイツには、この手の仕事はまだ」

「早いつて言いたいのか？」

足元に転がる枝を拾ったセリスは、ポキリと折るとそれを火の中に投げ入れる。足元から吹き上げる熱風にまかれ、セリスの長いブロンドの髪が放射状に広がる。

「昔の自分を見ているようで、イヤなのかしら？」

セリスの言葉に、カルトは無言だ。ただ、整えられた柳眉は八字になっている。

「いずれは通る道よ。それが、早いか遅いか、それだけの事よ」

カルトは溜息を付くと、セリスを見た。鉄面皮というわけではないが、その顔からはいかなる感情も考えも読み取れない。炎に照らされる美しい顔は、笑っているようにも見え、悲しんでいるようにも見える。

「先生には、これから起こる出来事が見えているみたいですね」

一陣の風が炎を大きく揺らす。目に届く熱風に、カルトは僅かに目を細めた。

「そう思うかしら？」

「ええ。今まで先生が俺たちに与えた仕事や試練で、間違っていたことはない。どんなに苦労しても、死にそうになっても、必ず道があった。その道さえ見つければ、先生が望む結末に辿り着けるようになっていた」

「知っているでしょう、カルト。私は未来視じゃないし、ましてや因果律を見極める事なんて不可能よ。湖面のように常にユラユラと揺らぐ未来を見通すなんて、尚更よ。でもね、私にも出来ることがあるの」

また小枝を折り、セリスは炎の中に投げ入れる。

カルトは炎に巻かれて燃えていく小枝を見つめた。

「貴方達を信じる事よ。だってそうでしょう？カルトも、大地も、紫も、私の弟子よ？私があらゆる事を教えてきたのよ。貴方達の力がどのくらいで、どのように考えて行動するのか、予め予測は立てられるわ。私はね、誤っていたらヒントを出して、正しい道に修正をしてあげるだけ。それにね、導き出される答えは同じであつたとしても、通る道によつて真実は違う場合もあるの。今回の紫と、カルトのようね」

「結果は同じだとしても、俺の視点で見ると、紫の視点で見るとでは、違う内容だと言うんですか？」

「そう言う事よ。大地が見れば、また違う答えを得られるでしょうし、麟世さんから見れば、また別の答えが導き出されるわ」

「紫は、大丈夫でしょうか？」

「心配は無用でしょう。あんな感じの子だけど、しなやかで柔軟で、それでいて決して折れることのない強固な芯を持っているわ。それが稲城紫よ」

「俺とは違うんですね」

少し寂しそうに口元を歪ませるカルトに、セリスは「何を甘えたことを言ってるのよ」と、肘でカルトの脇腹を小突いた。

「私の中じゃ、今も昔もカルトが一番手のかかる子よ」

「……………」

カルトは手にしたプリントに目を落とした。プリントにはいくつもの複雑な記号が合わさっている魔方陣が描かれている。カルトはつまらなそうに鼻を鳴らすと、それをそつと炎の中へ落とした。

一瞬にして炎に飲み込まれ、灰になっていくプリント。灰の一片がフワリと浮かび上がると、温められた空気に乗って空高く上っていく。

カルトは虚ろな眼差しで、すっかり日の暮れた星空へ灰が吸い込まれていくのを見つめていた。

星空には大きな月が浮かんでいた。

満月まで、後三日だ。

閉店間際のアルルーナに訪れた紫は、「麟世姉様、コーヒーを頂戴いゝ」と珍しくコーヒーを注文した。

麟世はアメリカンを入れると、紫の前に置いた。ピンク色のパーカーに黒いミニスカートという出で立ちの紫は、コーヒーに砂糖とミルクをたっぷり入れると、ちびりと口にして「うっ、苦い」と独りごちた。よく眠れていないのだろうか、紫は眠そうに目を擦りながら、黙って麟世の仕事を見つめていた。

閉店の時間になった麟世は、出入り口の鍵を閉めてカウンターの照明を残して全て落とした。

麟世は自分のコーヒーを煎れると、うつらうつらしている紫の横に腰を下ろした。もちろん、カラになった紫のカップにもなみなみとコーヒーを注いでやる。厨房では店主が翌日の仕込みを行っているため、後一時間はこうしてゆっくりとした時間がもてる。

「いつもの元気はどうしたの？」

「ん？あたしはいつも元気よ」

そう言ってニコリと微笑む紫は、両手でカップを包むように持つと、立ち上る湯気をフツと吹いた。

「でも、ちょっと凹んでるのも事実なの」

「……………そう」

麟世はカップに口を付ける。浅煎りのキリマンジャロ独特の強い酸味が鼻に抜ける。麟世はこちらから話を振らず、ジッと紫の言葉を待った。普段はマシンガンのように息つく間もなく話す彼女が、こうして黙っているのだ。恐らく、彼女の中では気安く口に出来ない深刻な問題なのだろう。

「姉様は、あたしの事を何処まで聞いた？」

カルトという固有名詞は抜けていたが、それだけで紫が何を言いたいのか理解できた。「大雑把な内容は大体」

紫はジツと手の中で揺れる黒い水面を見つめている。

「あたしね……………」

「あたしは……………」と、紫は二度続けた。しかし、開き掛けた口からそれ以降の言葉は出てこなかった。何かを言おうと口を開けるが、酸欠状態の魚のように、数度パクパクしただけで再び閉じてしまう。何度かそれを繰り返した紫は、ゆっくりと溜息を吐くと「姉様は何でカルトなの？」と、尋ねた。

「えっ？それは」

一瞬、麟世は口籠もった。はぐらかしてやろうかとも思ったが、こちらを見つめる紫の瞳は真剣そのものだ。麟世は「ん、そうね」と前置きをしてから。

「たぶん、私と同じ気持ちを共有できるから、かしら」

「同じ気持ち？」

「ええ。紫ちゃんも知ってるでしょう？私のお祖父ちゃんとお婆ちゃん、それにお父さんと兄さんは、第三種生命体に殺されたって」「うん。詳しくはカルトも大地も話してくれないけど。それは知ってるわ」

「白河家の呪いでね、本当は私も去年の秋口に死ぬはずだったの。でも、それをカルト君と大地が救ってくれたの。途中でね、私は一方的に依頼を破棄したわ。玉碎覚悟で、私は第三種生命体と差し違えるつもりだったの。でも、もうこれで終わりって所で、二人が駆けつけてくれたわ」

「それで、姉様はカルトに惚れたわけ？」

「ううん。それは本当に小さな切欠に過ぎないの。私は、初めカルト君にあった時、クラスメイトだと気がつかなかったわ。でも、私は初めて見た時から、あの目に引かれたの。青空のように澄んでいて、子犬のように寂しそうな眼差し。あの目を見た時、私は思ったの。ああ、この人なら私のことを理解してくれる。この人も、私と同じような気持ちを味わってきたんだって」

「でもね」と言つて、麟世は頬を緩めた。細められた目は、紫で

はなく違うものをみていた。

「でも違った。私とカルト君が見ていた物は違ったの。私は過去を見ていて、カルト君は未来を見ていたの。あの人がいたから、私は本来の意味で生きていられることが出来るの。過去ではなく、未来を見て生きていくことを教えてくれたの」

「それはきつと、カルトも同じよ。アイツ、麟世姉様と知り合ってから、随分変わったもの」

「ふふ、そうかもね。でもね、私はカルト君と出会って変わることが出来たし、これからも変わっていくと思う。カルト君と見ている先も、目指しているものも違うけど、私は、ずっとカルト君の側にいたいと思う。たまに、顔を寄せてカルト君と同じ方向を見てみたいと思うけどね」

「そっか……。人を好きになるって言うのは、ずっと一所に居たとか、同じ事をしていたいとか、そうした物ばかりじゃないのね」
「月並みな言い方だけど、離れていても気持ちはいつも繋がってるって言うのかな。まだまだそんな関係じゃないけどね」

カルトとそんな関係になるのは、一体いつの話だろう。今告白しても断られることは分かりきっている。だから、今の距離で満足しているが、もう少し時間が経てば、もっと距離を縮める事が出来るはずだ。

麟世はコクリとコーヒーで喉を湿らせると、横目で紫の様子を伺った。紫はコーヒーに口を付けて「これ、ニガ酸っぱい」と眉根を寄せた。

「麟世姉様、あたし、雪路を殺す事が出来るかしら？」

紫は消え入りそうな小さな声を発した。昨日、電話の向こうであれほどはしゃいでいた人物とは思えないほど、紫はシュンツと頂垂れていた。ギョツと小さな唇を噛み締め、自分の行動が正しかったのか、胸中で反芻しているのだろう。しかし、結局答えは出ない。

（違うわよね。紫ちゃんは、答えを出している。ただ、それを実行出来るかどうか分からないのよ）

麟世は答えることが出来ない。これには、火野雪路という人の命が関わっているのだ。カルトは雪路のことを第三種生命体だと言っていた。そして、カルトは火野雪路を人ではなく、第三種生命体として認識している。口にはしないが、カルトが雪路を信賴していないことは一目瞭然だった。紫が雪路を殺せないとしたら、間違いくカルトが動くだろう。そして、一切の感情を挟まずにマクシミリオンを振り下ろすはずだ。

それではいけない。麟世にも、それだけは断言できる。これは、紫がやらなければいけない事なのだ。紫のためにも、火野雪路のためにも。

「本当は、部外者の私がこんな事を言うべきじゃないんだろうけど」
麟世はそう前置きをした。紫の視線が注がれる。

「今回の事件。紫ちゃんは命を救うんじゃないで、心を救うんだと思う。人として最後を迎えたいと思う火野先輩の心を救う戦いだと思うの。次の満月で、火野雪路という人格はなくなり、悪魔になる。そうカルト君は言っていたわ。だから、紫ちゃんは、火野雪路が火野雪路である時に、殺して上げる事が重要だと思うの。ううん、火野先輩が望む形で最後を迎えるのが、一番良いのかも知れない」
「雪路が、雪路であるある時に……。雪路の望む形で……」

紫は目を伏せた。長い睫が不安そうに揺れている。

紫には分かっているのだろう。自分のやるべき事が。ただ、誰かに背中を押してもらいたかったのだ。カルトでも、大地でも、セリスでもない。少し離れた所にいる麟世に、それで良いのだと言って貰いたかったのだろう。

「……………そうよね。あたしがやらないで、誰がやるのよ……………。雪路はあたしの彼氏なんだもの。彼女が最期を看取ってやらずに、どろろろっていうのよ」

「紫ちゃん、私はこうして応援することしかできないけど、頑張っ
てね」

麟世はカウンターの上で握られていた紫の手を握り締めた。麟世

の掌にも収まってしまふほど小さな手。この手で、紫はこれから数多の第三種生命体と命のやり取りをしていくのだ。多くの命を救い、また奪っていくのだろう。

「大丈夫よ、麟世姉様。あたしは大丈夫。……だいじょうぶ……」

熱い雫が手の甲に落ちた。紫は小さな体を震わせて、大粒の涙を零していた。口をきつく結び、口から嗚咽が出ることを必死に押さええている。

「あたしが……絶対に……雪路を……殺すんだから……。雪路を、救ってやるんだから……」

悲壮な叫びが聞こえてきそうだった。

麟世には紫の気持ちがよく分かった。紫は心の底から雪路を愛しているのだ。演技で人を愛するほど、紫は女性として成熟していない。何の迷いもなく、理由もなく人を愛することが出来る。それは幸せなことであると同時に、不幸なことでもあった。

麟世は声を殺して無く紫を、ただ黙って見つめていることしかできなかつた。

時間は過ぎ、三日後の満月の日を、紫は迎える事となった。

五章 これが最後のデートです

五章 これが最後のデートです

満月の日。

抜けるような青空の下には、無数の桜が美しい花をつけていた。気の早い桜は散り始めており、暖かな風が吹く度、ヒラヒラと愛らしい花弁を散らせていた。

紫と雪路は都内近郊にある有名テーマパークに来ていた。

休日と言う事もあり、園内は人でごった返していた。

「あーん！もう、折角来たって言うのに……！」

人気アトラクションの前に置かれた看板には、三時間待ちの文字が記されてあった。時間を掲げるネズミのマスコットに舌打ちをしながら、紫はどこか空いているアトラクションが無いか地図を広げる。しかし、広げてみて紫は小さな溜息を一つついた。

ここ数年、遊園地など来たことの無かった紫。アトラクションの名前を一目見ただけでは、何がどんな乗り物なのか判断することが出来なかった。

（あゝ、あたしって、訓練訓練で、もしかして時代の波に乗り遅れてる？）

お洒落や流行りの情報は雑誌やネットでリサーチしているつもりだったが、ハンターをやっている分、やはり普通の高校生に比べれば獲得する情報量が少ないのは否めない。友人といえる時は感じたことがなかったが、こうして異性とのデートとなると、話は別だ。遊園地には来た物の、普通の女の子が遊園地でどのように楽しめばいいのか、紫にはイマイチ分からなかった。

「うー……、雪路、ゴメン。あたしのリサーチ不足だわ」

結局、三時間待ちの列に並んだ紫は、横に並ぶ雪路の様子を伺っ

た。

「ん？気にするな。遊園地に行きたいって言ったのは、俺なんだから」

軽快に笑う雪路は、そう言ってクシャクシャと紫の頭を撫でた。

今日の紫は、虹色メツシユではなく、烏の濡れ羽色だった。

「虹色メツシユも良いけど、黒髪も良いね」

暖かな陽光を受けて輝く紫の髪を見て、雪路は目を細めた。紫はポツと頬を染めると、指先に髪を絡ませた。光を受ける髪には、光の雫がキラキラと反射していた。

「アハハハ、実を言うとな、あたしの髪は元々黒いの。魔法で光を屈折させて、虹色メツシユに見せているんだ」

「え？そうなの？」

「さすがに、染めちゃうと学校で怒られるから。でも、ハンターでいる時は、髪を虹色にしてるの。印象的な髪なら、普段はあたしがハンターだって気づかれにくいでしょう？」

「確かに。紫の虹色の髪を見て、俺もすぐに思い出したからね」

「エヘヘ、そうでしょう」

そんな話を話していると、時間はアツと今に去っていく。紫はいくつかのアトラクションに乗ってみた。初めは子供だましかと思っていたが、アトラクションの雰囲気作りが上手くできており、実際に乗ってみると本当に冒険しているような気分させられたりした。

最後の日だというのに、雪路は一時でも表情を曇らせることはなかった。まるで、今日を生き抜き、明日も、明後日も今日と同じように生きていられると確信しているかのようだった。

雪路の屈託のない笑顔を見ながらも、紫の心は晴れることがなかった。

残された時間が刻一刻と削られていく。

時計の針は、この世界に生まれ落ちてから皆平等に刻まれていく。この世界が不変の物であるというのなら、本来時間という概念は必要ないのかも知れない。木々や動物たちは、時の流れを感じること

はすれども、時間という物を突き詰めて考えたりすることは出来ないだろう。

朝になると日が昇り、夜になると日が沈む。春夏秋冬が訪れ、冬が終わるとまた春が訪れる。木々は色づき葉を枯らす、春が巡れば葉を茂らせ実を結ぶ。栄枯盛衰は世の常という言葉があるが、それは人ばかりでなく全ての生物に当てはまる。地球というミクロの世界で見れば、そこには多種多様な生物に満ちた躍動ある世界が広がっているかも知れないが、広大無辺な宇宙、マクロの観点から見れば、そこはやはり静謐に満ちており、時の流れは感じられないだろう。

太陽が寿命を迎えて惑星を飲み込もうとも、ブラックホールが無数の星々を飲み込もうとも、ハイパーノヴァが銀河を吹き飛ばそうとも、宇宙にしてみればそれら全ては取るに足らないこと。滅びのない、無限が続く世界では、何が起ころうとも取るに足らないこと。しかし、人は違う。命は有限であると知っているからこそ、時間を感じ取り、精一杯生きようとする。

普段は何気なく過ぎ去っていく時間。授業中は緩慢に、楽しい時は光の如く過ぎ去っていく物。今の紫には、時の流れほど憎々しい物は存在していなかった。

雪路と過ごす楽しい一時。しかし、秒針が時を刻む度に心は軋み、崩壊してしまいそうなほど辛い。

「紫、丁度夕方のパレードの時間だ！行ってみよう！」

気がつくと、陽は傾き始めていた。

人だかりの中、何とか人混みの割れ目を見つけて紫と雪路は最前列に辿り着いた。

「俺、一度これを見てみたかったんだよな！」

徐々に太陽は光を弱め、闇のベールが東の空から天上を覆い隠していく。園内に照明が灯り、来園客の表情を照らした。

皆、一様に笑みを浮かべていた。これから始まるパレードに胸を踊らせている。夢の国。そう、ここは日常を忘れられる夢の国だ。

この国では誰もが子供に帰れる場所なのだ。

紫は目を輝かせる雪路を見上げた。彼も童心に返っているのだろうか。幼い頃味わうことの出来なかった事を、今、この瞬間楽しんでいるのだろうか。

雪路の腕に自らの腕を巻き付けた。小さな頭を、コトンと雪路の肩に預ける。

「どうした？」

「何でもないの。こうしていたいのに……」

煌びやかなパレードが始まる。

馬車に乗ったキャラクターが、色取り取りの光を掲げながら、来演客に手を振っていた。賑やかな音楽。華やかな光。愛くるしいキヤラクター。紫の目には、それら全てが霞んで見えた。気がつくとき、涙を流していた。

手の甲で涙を拭った紫は、ムリして笑みを浮かべた。雪路はパレードに見入っており、紫の涙に気がついていない。例え気がついていなくても、紫は笑顔でいなければいけない。最後の瞬間まで、紫は笑顔でいると決めたのだ。それを、雪路が望んでいるのだ。

三十分ほどで、パレードは終了した。宴の終焉を思わせるパレードの終了。他の来演客は、帰り始める人も多いのだろう。広大な園内は、急に人口密度が低くなった気がした。

「少し、歩こうか」

「うん」

海を思わせる湖の周りを、紫と雪路は歩き出した。とりとめのない話をしながら、ゆつくりと歩く。しかし、やはり会話は続かない。会話は自然と途切れ途切れになり、いつしか、話すことなくただ歩いていた。

閉園の時間が迫るまで、二人は無言で広い園内を歩き続けた。そして、満月の写り込んだ湖がよく見えるベンチに腰を下ろした。終わりが始まるうとしていた。

どのくらいベンチに腰を下ろしていただろう。

閉園のコールが流れた。夢の国は目の前で瓦解した。代わりに目の前に現れたのは、だだっ広い遊園地だ。人の姿は皆無で、遠くに見える人影も足早に出入り口に向かっていた。

少し肌寒い春の夜風が湖面を優しく撫でる。写り込んだ満月が崩れるが、すぐに元に戻る。ハラハラと舞い落ちる桜の花びらが、風に舞って湖に滑り込んでいく。

「そろそろ、か」

そう呟く雪路に、紫はコクリと頷いた。

どちらとも無く立ち上がる。

俯いていた紫は、視線を感じて目を上げた。雪路と目があつた紫は、口元に笑みを浮かべた。笑わなければ、きっと紫は泣いてしまう。雪路の前で、涙を見せるわけにはいけない。

紫は雪路の手を握った。雪路の手から伝わる温もり。この温もりは一生忘れない。紫は目を閉じ、雪路の温もりを記憶に焼き付けた。紫が向かったのは、園内にある雑木林だ。普段は立ち入り禁止なのだが、今夜は特別に許可を貰っている。園外では、妖魔攻撃隊の隊員が待機しているはずだ。これで、この遊園地の中には紫と雪路の二人しかない。

「……………」

紫は振り返った。人の気配は疎か、物音一つしない。人工の林に生命は極端に少なく、深い闇に包まれた林が続いているだけだ。

「偽りの命である俺が死ぬには、偽りの楽園、偽りの自然の中で死ぬのが一番だ」

「冗談か本気か見分けの付かぬ口調で雪路はそんな事を言っていた。紫は雪路の本心を計りかねながらも、言われた通りにした。

「死ぬ事に、恐怖は感じないの？」

紫は足を止めた。右手で雪路の左手を強く握り、左手はすぐ脇にある木に当てる。

「……………怖くないと言えば、嘘になる」

木々に遮られ、月光は此処まで届かない。薄闇の中で、雪路の表情を見る事は出来なかった。雪路はどんな表情をしているのであるうか。悲しみだろうか、それとも恐怖だろうか。もしかすると、何の表情も浮かべていないのかも知れない。

「だけど、受け入れるしかない。どのみち、今日を過ぎれば俺は悪魔に体に乗っ取られる。そうなれば、死ぬのと同じだ。だったら、俺が他の人を殺す前に、紫に殺して貰いたい」

「……………ズルイよ」

木に当てていた左手で顔を覆った。

「ズルイよ！雪路は、自分の意見を一方的に言うだけ！あたしの意見はどうなるの？あたしだって、雪路に言いたいことは沢山ある！」

我慢が出来なかった。紫は大粒の涙を流しながら、雪路に詰め寄る。雪路は紫の剣幕に押されるようにして数歩後退した。雪路が月光の下に躍り出た。

月光に照らされる雪路の顔は青ざめていた。やはり、死ぬのは怖いのだ。

「あたしは、雪路とずっと一緒に居たい！一緒に居たいよ！」

「何を言ってるんだ。君は、俺を殺して、普通の生活に戻るんだ！俺は、君が居たから、自分が死ぬ事を受け入れられたんだ」

「あたしはイヤよ！貴方が好きなの！雪路が好きなの！助けたい！どうしても雪路を助けないの！」

紫は地団駄を踏んだ。短い髪を振り乱し、その場に崩れ落ちる。

「あたしは、殺したくない！雪路を殺したくない！」

小さな拳を固め、地面に叩きつける。何度も何度も地面に打ち付ける。龍因子で強化された拳は、小さな拳を痛めずに地面を小さく凹ませる。

「誰か教えてよ！雪路を殺さなくて済む方法を！先生！カルト！大地！お願いだから教えてよ！誰か…何か…方法を…教えてよ…

……………」

泣かないと決めたのに。雪路を笑顔で送ってあげると誓ったのに。紫は泣き崩れた。常日頃、セリスから如何なる時も冷静であれと言われているにも関わらず、紫は取り乱していた。それは、自分でも驚くほどの事だった。溢れ出た感情は涙と叫びになって迸る。一度放たれた激情は、もう制御できなかった。

月光の差し込む雑木林に、紫の悲鳴とも嗚咽とも付かない泣き声が流れた。どこかで、バサバサと野鳥が羽ばたいた。

「紫……」

紫の傍らに跪いた雪路は、丸くなる紫を抱きしめた。背中から全身に広がる雪路の温もり。それは、紛れもなく人の持つ温もりだった。

「俺の事を思ってくれているのは、本当に嬉しい。だけど、もう仕方のないことなんだ。俺の事を本当に思ってくれているなら、せめて、苦しまないように楽にしてくれ」

投げかけられる優しい言葉。しかし、その言葉は更に紫の心を掻き毟るだけだった。

「雪路……、あたしは、あたしは……」

分かつてはいるのだ。方法は一つしかない。今回は、最初から一つしか方法が無いのだ。過程はいくつもあるだろうが、どの道を選んだとしても、辿り着く答えはたったの一つなのだ。

雪路を殺して事件が終わる。それ以上でも、それ以下でもない。この世界から、第三種生命体が一体消え、それと同時に高校生が一人忽然と姿を消すだけなのだ。学校には雪路は転校したと伝えられるだけ。あらゆるデータベースから火野雪路の名前が消える。それで、終了なのだ。

紫は立ち上がった。袖で涙を拭い、無言で頷く。雪路は紫の手を握ると、再びゆっくりと歩き出した。

だが、雪路との思い出は紫の中に残る。紫が死ぬまで、この世界で生き続ける。それが、この世界に残された人間の独りよがりだと言ふ事はよく分かる。人は死ねばそこで終わりだ。怒りも、憎しみ

も、悲しみも、愛おしさも、故人の感情が現世に残るのではない。それら全ての感情は、残された人の中に残るのだ。逝った人を思い、残された人は自分の気持ちに折り合いを付けるため、様々な理由と感情を付け足すのだ。如何なる理由でも良い。自分を納得させて次に進むこと。それこそ、これから紫が生きていかなければいけない世界なのだ。

木々の隙間から月光が差し込んでくる。静謐という言葉がピッタリの人造林。その中程に、小さな空き地程度の広場があった。

月光に照らされた桜の木が咲き乱れている。満開になった桜は、後は散るだけ。優しい風に撫でられるだけで、小さな花弁を雪のように舞い散らせる。息を飲むほどの美しい景色だが、その景色は色が極端に少なく、冷たい硬質な雰囲気纏っていた。

「雪路、ここよ」

泣きはらして赤くした目を緩めた紫は、名残惜しそうに雪路の手を離れた。

「カーディナル」

紫の手に細身の長剣が握られた。黒かった髪の毛に虹色のメッシュが差す。

「終わりにしましょう、雪路……………」

紫の掲げたカーディナルの切っ先が、雪路の喉元に向けられた。

幻想的な空間に佇む一組の男女。

木にもたれ掛かりながら、その様を少し離れた所から見ていたカルトは、背後から感じた気配に首だけで振り返った。

「なんだ、カルト。お前も来てたのかよ」

「うん。やっぱ、気になるからな」

「だな。あんなのでも、ボク達の弟子だからな」

ジーンズにパーカーというラフな出で立ちで、草薙大地がこちらに歩いてくるところだった。

「紫に呪符を渡したんだな。アイツ、すっかり園内に結界を張ってる。紫がワザと逃がさない限り、火野雪路は逃げる事は出来ない」カルトは空を見上げた。木々の隙間から大きな満月と瞬く星々が伺える。一見すると、何の変哲もない夜空だが、目を凝らして星の一つ一つを見てみれば、光が僅かに歪んでいることに気がつくだろう。薄い透明な膜にテーマパークが覆われているのだ。

「どうしても仕留めるからってさ、昨日頼まれた。張るだけの簡単な物だけど、これだけの枚数を張れば一級品の結界になる」

大地の言葉を肯定するように、カルトが寄りかかる木にも一枚の呪符が張られていた。この木は、先ほど紫が手を突いた木だ。心は大きく揺れながらも、しっかりと結界を張っている。他にも、ジェットコースターの支柱やベンチの裏、看板、テーブルの裏側など、様々な場所に呪符が張ってあった。紫と雪路は、今日一日で園内の隅々を歩いたのだろう、園内全域にこうした呪符が張られていた。

ゆっくりと、しかし確実に火野雪路の終わりが近づいていた。

カルトは、カーディナルを雪路に向けたまま微動だにしない紫から、対峙する雪路に注意を向ける。こちらからは雪路の背中しか見えないが、彼がどんな表情をしているのか、興味があった。

「どうするんだ？あのまま紫がフリーズしたら、お前が出るのか？それとも、ボクが行ってこようか？」

ニコニコと場違いな笑みを浮かべる大地に、カルトは鋭い一瞥をくれるが、大地は全く意に介さない様子で二人の様子を見つめている。

「手出しは無用。これは、紫の仕事だよ……。俺たちは、ただ見てるだけだよ」

「ふん。ボク達はギャラリーって訳ね」

「ギャラリーはお前だけ。俺には見届ける義務があるの。仕事の一環なの、これがね」

カルトの言葉に、「やってることは見てるだけなんだし、同じじゃない？」と言われたが、反論しなかった。カルトの前で雪路が動い

ただ。彼は、カルトが付けたミサンガを、自らの手で取り払った。邪悪な龍因子が波紋のように広がった。園内にいた鳥たちが一斉に飛び立った。

カルトは目を細め、急速に変貌を遂げる雪路の背中を見つめた。彼が何を考え、何を思いミサンガを外したのかは分からない。しかし、この瞬間、この世界から火野雪路という人間の存在は消え、代わりに悪魔が現出した。純白の司祭の衣服を身につけた魔術師、レギナルド・スコットが言及した悪なるデーモンの一人、バラトロン。バラトロンの背中越しに見える紫は、悲しそうに目を伏せていた。その目尻から、一筋の涙が一滴こぼれ落ちた。

「さあ、紫、俺を殺せ……………」

目の前で雪路は手を広げていた。こちらを見つめてくる瞳は力強く、カーディナルを握ったまま微動だにしない紫を非難しているかのようだった。いや、実際雪路は紫を非難しているのかも知れない。雪路はとくに覚悟を決めていたのだ、だから、こうして真っ直ぐな瞳で見つめられるのだ。

「……………ッ！」

しかし、紫は雪路の瞳を見返すことが出来ない。雪路の瞳に晒されているだけで、心が、気持ちが悪れてしまいそうだ。

「私は……………！」

カーディナルの切っ先が震える。

スペルが口から出てこない。

雪路が動いた。一步、足を前に踏み出してくる。カーディナルが雪路の胸に触れた瞬間、紫は見えない力に押されたように一歩下がった。

ほんの少し、力を入れて手を突き出せば、雪路の体を貫ける。それで、全てが終わるのだ。一人の命が、簡単に墜ちる。指先から砂がこぼれ落ちるように、人の命もこの世からこぼれ墜ちるのだ。

紫は俯いた。

人の命は、そんなに軽い物ではない。軽い物ではあっていけない。悪魔だとしても、目の前にいる雪路は、紛れもなく人の心を持っている。人として生き、最後の最後まで人として死のうとしている雪路が居るのだ。

「やっぱり、この姿じゃダメか……………」

雪路は呟いた。

ハッと紫は顔を上げた。

雪路の右手が、左手首に添えられる。

「ありがとう、紫。君と出会えた三日間、とても楽しかった。ありがとう……………」

雪路の目から銀色の雫がこぼれ落ちた。

「あ……………」

右手がミサンガを握り締め、引き千切った。

雪路の体から渦を巻いて龍因子が膨れあがる。衣服はあつという間に消失し、代わりに煌びやかな祭服が浮かび上がってくる。

細い手足が伸び、全身が黒い毛に覆われていく。黒目が失われ、代わりに濁った赤い瞳が浮かび上がる。口からは牙が映え、耳は鋭く尖った。火野雪路の最後は、余りにお呆気なく、静かだった。一切の余韻も残さず、彼はこの世から消滅した。

「ああ……………！雪路……………！雪路……………！」

よろよろと紫は後退した。桜の幹に背中を預け、両目を押さえる。涙が溢れて止まらない。

バトロンは右手を掲げた。召喚の五芒が龍因子によって描かれ、そこから一本の錫杖が出現した。シャランと音を立てる錫杖を、バトロンは一度振った。

雪路は、最後まで紫のことを思っていた。紫が殺しやすいようにと、人の姿を、人の心を捨てた。人として死にたいという最後の希望を自らの手で捨てたのだ。

「ゴメン、雪路。御免なさい……………」

紫は雪路に詫びた。この声が雪路に通じているかどうか分からない。しかし、紫は謝ることしかできなかった。

ザッ！

下草を薙ぎ払う音と共に、気配が迫ってくる。涙に濡れる顔を上げた紫の頬に激しい衝撃が走り抜けた。目の前が一瞬白くなり、次の瞬間激しい痛みが全身を駆け巡る。

バトロンの持つ錫杖に殴られたと理解できた時には、紫は桜の木に顔を打ち付けていた。

「クッ……………」

紫が顔を上げると、再び錫杖が振り下ろされた。後頭部に激しい痛みと鼻の奥に鉄の匂いが充満した。ドロリとした生暖かい液体が後頭部から首筋に滴り落ちてくる。

バトロンは、執拗に紫を殴り続けた。何かを叫ぶわけでもなく、ただ機械的に力一杯錫杖を振り下ろす。

桜の木にもたれながら、紫はその攻撃を甘んじて受けていた。頭部、顔面、首筋、肩、腹部。目に止まるあらゆる部位をバトロンは殴り続ける。

龍因子を纏った錫杖の攻撃は、同じく龍因子で強化された紫の肉体にダメージを蓄積した。紫は虚ろな瞳で、自らを殴り続けるバトロンを見上げていた。満月を背にするバトロンは、目を煌々と輝かせ、もはや人と呼べる部分は欠片も残っていなかった。

人間よ……………！去ね！

龍因子を纏った錫杖が振り下ろされる。しかし、その錫杖は途中でピタリと動きを止めた。バトロンは猿のように後方に飛び退くと、錫杖を構えた。

これまでにない静寂が林を包み込んでいた。強大な龍因子が場を

押し、息が詰まるほどの緊張感を生み出していた。

「……………」

桜の木に手を突きながら、紫は立ち上がった。

第三種生命体であるバルトロンを圧倒する龍因子を放出しているのは、他でもない、この小さな少女だった。

「もう、良いわよね、雪路……………」

口元を流れる血を袖で拭った紫は、カーディナルを一閃した。周囲に立ち籠めていた龍因子が一瞬にして払われ、バルトロンは脱力したように肩を落とした。

火野雪路は消え去った……………

元より奴は虚ろな存在……………

自らの意志……………感情はない……………

役目は十分に果たした……………

「人の言葉を理解するし、話すのね。なるほど、なかなかの上級悪魔ってワケね。」

カーディナルを一枚のハンカチにした紫は、目元を拭った。一度、二度と大きく深呼吸した紫は、最後に長く息を吐き出し、僅かに腰を若干下げた。

お前と話していたのは……………

雪路ではなく、私だ……………

「アンタ、一つ言っておくわ。それ以上、雪路のことを言わないで。これは忠告じゃないわよ、警告よ、ケ・イ・コ・ク！」

右手を振るうと、ハンカチだったカーディナルが槍へと変化した。右半身を後方に引き、グツと重心を落とす。龍因子で肉体を極限まで強化し、神速の一撃を放つために力を溜めた。

お前が描いていたのは幻想……………

お前は幻と恋をしていた……………

散った桜の花弁が、宙を舞った。

紫が桜の花弁を撒き散らしながらバラストロンへ突貫した。

しかし、バラストロンは錫杖を一回転させると、結界を展開した。

紫の放つ突きは、結界に飲み込まれた。そして、頭上に出現した結界からはカーディナルの穂先が紫目掛けて振り下ろされた。紫は眉一つ動かさず、突き出したカーディナルを手元に戻した。すると、頭上の結界から迫るカーディナルも引込んだ。

バラストロンは大きく跳躍すると、月を背に浮かび上がった。法衣を突き破り、巨大なコウモリの翼が生えていた。

消える……………稲城紫……………！

シャンツと錫杖を鳴らしたバラストロンの周囲に、稲妻が瞬いた。

そして、錫杖の動きに合わせて稲妻が降り注いだ。ドラゴンの咆吼を思わせる爆音をと轟かせ、稲妻は紫に殺到する。

「ざけんじゃないわよ！」

カーディナルを蜘蛛の巣のように中空に展開した紫。バラストロンの放った稲妻は、カーディナルに阻まれ霧散した。

「言っておくわよ、バラストロン！お前はここから逃げられない！何故ならあたしが結界を張ったからだ！だけど、そんな事関係ないわよね！だって、お前は此处で消えるんだもの！雪路と同じようにね！」

「我が名、稲城紫の名において」

バラトロンの再び稲妻を放つ。しかし、紫は舞うように紙一重で稲妻を躲していく。簡易結界が突き破られるが、紫は表情一つ変えなかった。

「我が体に宿る聖霊達よ」

力ある言葉が紡がれる度、清浄な龍因子が場に満ちる。

バラトロンも感じ取っているのだろ。稲妻と共に火球を放つが、その全てを紫は躲し続ける。

「天に広がる十二の宮に宿りし力を解放せよ」

飛び掛かってきたバラトロンの錫杖を、槍の形を成したカーディナルで受け止める。バラトロンを押し返した紫は、左手でソロモンの印象を描き出した。

「ラウム」

ラウムの印象が弾けた途端、小さなカラスが出現し一声鳴いた。その声は、場を振るわし、紫とバラトロンの間に見えない壁を生み出した。

紫はバラトロンの周囲を回りながら、更にスペルの詠唱を続ける。

「メシヤム（白羊宮）、ヴリシャ（金牛宮）、ミトウナム（双児宮）、カルカタ（巨蟹宮）、シンハ（獅子宮）、カニヤ（処女宮）、トウーラ（天秤宮）、グリシカム（天蠍宮）、ダーヌス（人馬宮）、マカラ（摩羯宮）、クンバー（宝瓶宮）、ミナム（双魚宮）。その力を、今、此処に具現化せよ！」

紫は黄道十二宮をサンスクリット語で口にした。

俄に地面が輝きだした。青白い粒子が、至る所から発生し天へと上っていく。そして、紫とバラトロンの対峙する広場を中心にして巨大な魔方陣が浮かび上がった。

光り輝く林。光に照らされるバラトロンの猿に似た醜悪な顔が歪んだ。叫び声にならない叫びを上げラウムが生み出した壁を錫杖で叩く。執拗な攻撃を受け空間にヒビが走り、砕け散った。バラロンが猛烈な勢いで紫に向かって駆けてくる。恐らく、これが最後の攻撃だとバラロンも分かっているのだ。

場に満ちる龍因子。スペルマスターのスペルを受けきれただけの力を、バラトロンは持ち合わせていない。

消えろ！人間！

これまでにない強力な龍因子を纏った錫杖が紫の頭部目掛けて振り下ろされる。しかし、紫はカーディナルを一枚の布に変形させると、それを広げてバラトロンの視界を遮った。錫杖が布となったカーディナルを打ち付ける。しかし、錫杖は空気のように軽いカーディナルを地面に叩きつけたただけだった。そこに、紫の姿は無かった。

「全ての力が解放された今、黄金郷への扉が開かれる」

バラトロンの背中に紫の言葉が投げつけられた。振り返るバラトロン。その顔は、恐怖に歪んでいるかのようだった。

「消えなさい！『クリタ・ユガ』！」

『ヒンドウの黄金の時代』の意味を持つクリタ・ユガが放たれた。地面に浮かび上がった魔方陣は紫の指さす対象、バラトロンに足元に集約し、一条の光となつて天を抜いた。音もなく立ち上る巨大な光の柱は、近隣の住民ばかりではなく、遠く離れた場所からでも視

認できるほどの輝きを持って天へと伸びた。

バトロンは叫び声を上げる暇もなく、クリタ・ユガの光に飲み込まれ、龍因子の残滓を残すことなく、この世界から消失した。

「……………」

空高く、何処までも天へと伸びる光の柱が徐々に力を失い収束していく。そして、僅かな残光を残してクリタ・ユガの光は消え去った。

林を流れてくる風が桜の枝を揺らし、桜吹雪を生み出す。

「終わったわよ、雪路……………」

紫は風に揺れる髪を押さえながら、元来た道に戻ろうとした。しかし、歩き始めてすぐ、足を止めた。足元には、雪路が引き千切ったミサンガが落ちていた。月光を受けてキラキラと輝くミサンガ。

紫は指先でミサンガを拾おうと手を伸ばした、そして、指先が触れた瞬間、動きが止まった。

「……………たく」

ニコリと口元に笑みを浮かべた紫は、ミサンガを拾い上げた。

「ちよつと、もう出てきても良いんじゃない？」

紫は林に向かって叫んだ。気配も視線も感じない。だが、彼らがこの場にいるのは間違いない。それは、感ではなく確信に近い物だった。数秒後、予想通り兄弟子達が林の中から登場した。

「バレちゃったか？完璧に気配を消していたんだけどな」

頭の後ろで手を組んだ大地が笑う。

「感に決まってるだろう」

カルトは紫の手に握られているミサンガを見て、バツの悪そうな表情を浮かべた。その表情は、悪戯がバレた子供のようなだった。

「はい、返すわよ」

ミサンガを差し出す紫だったが、カルトはそれを矯めつ眇めつすると、プイツと顔を背けた。

「何だい、そのミサンガは？」

「何だいって、これはアンタのでしょう？ 龍因子はカルトのだし、結界は大地が……」

怪訝な表情かべる紫。大地を見ると、彼も「さあ？ そんな結界張った憶えないけど？」と肩を竦める。

「それ、火野雪路が持っていたやつだろう？ だったら、お前が貰っておけよ。形見、としてさ」

明らかに嘘をついていると分かる二人のリアクション。しかし、その馬鹿馬鹿しい嘘がとても嬉しかった。

「……………うん、ありがとう」

そう言って、紫はミサンガを左手首に巻いた。大地が張った強烈な結界は、紫の龍因子を体の奥底に押さえ込んだ。きっと、この結界の力で雪路は最後の最後まで自分を失わずに済んだのだろう。そして、その強力な結界のベースとなったカルトの龍因子は、このミサンガが耐えきれぬギリギリまで注ぎ込んであった。

「ほら、紫」

突然、カルトの手から何かが放られた。紫は弧を描いて飛ぶそれを両手でキャッチした。

「缶コーヒー？」

「そ。お前も少しは大人になったんじゃないか？ ブラックの良さが分かる素敵なレディーにさ」

そう言って、カルトと大地は同じ缶コーヒーを口元に運ぶ。

「もちろんだよ。生まれてこの方彼女の居ないあんた達よりも、恋愛経験は豊富になったんだからね」

紫は温いコーヒーを口の中に入れる。苦みと同時に酸味が口内を刺激した。

「うえ、苦い……………」

紫の言葉に、兄弟子達は声を上げて笑った。

「もう、笑うな！ だって、ホントに苦かったのよ……………」

もう一口コーヒーを啜る紫。彼女の目からは、何故か涙がこぼれ

落ちていた。

「ホントに……、苦かったんだから……」

止めどとなく溢れる涙。紫の涙を見て、カルトも大地も顔を歪ませた。

「……そうだな。まだ、お前には少し早かったかもな……」

そう言つて、カルトは紫の頭を撫でてくれた。

言葉が出なかった。声を出して泣く事も、弱音を吐くことも出来なかった。これが、仕事なのだ。これが、ハンターという職業なのだ。第三種生命体を倒し、人々に喜ばれるだけが仕事ではない。時には、悲しく辛い思いをするのだ。

歯を食いしばり、涙を拭った紫。ムリに作り笑いをした紫は、二人の兄弟子に頭を下げた。

「カルト、大地、ありがとう……！」

この仕事が百点満点だったとは言えない。しかし、紫が仕事を終わらせたのは紛れもない事実だ。この結果に至るまで、様々な事があつた。そして、初めて仕事を終わらせて、改めて二人の兄弟子の凄さが理解できた。例え戦闘能力での差を埋めたとしても、この二人にはまだまだ敵わない。そう思わせてくれる二人が、とても心強かつた。

きつと、紫はこれから二人に迷惑を掛けるだろう。しかし、この兄弟子達は紫を優しく見守り、気がつかないところで手を差し伸べ、サポートをしてくれるだろう。

「あ、ああ……、うん……」

二人の気配が遠ざかる。不審に思つて顔を上げた紫。カルトも大地も、空を見上げていつでも逃げられる体勢を取っていた。

「……ちよつと、なにやってるのよ？」

「え？ いや、紫が変なことを言うからさ、雨とか槍が降ってくるのかな、と」

良く晴れた星空を見上げ、大地はそんな事を呟く。

「雨とか槍なら、まだマシだろう。俺は、クリタ・ユガの残滓が降

り注いでくるんじゃないかと思ってるんだが……」

カルトに至っては、今にもマクシミリオンを手元に呼び出しそうな勢이었다。

「……たまには人がしんみりしたいと思っているに！アンタ達二人、ほんつつつつつとくに、バカね！」

紫の怒声が、静まりかえった林の中に響き渡った。この最後の叫び声が、今日、このテーマパークで生じた一番大きな声だった。

エピローグ 真相は満月と新月なの？

エピローグ 真相は満月と新月なの？

紫の事件が終わった翌日、カルトはいつもの如くアルルーナを訪れていた。

「はい、今日も一日補習と訓練お疲れ様」

麟世はエスプレッソを入れてくれた。半分のカップという意味で『デミタス』とも呼ばれるエスプレッソに、シュガースプーンで砂糖を三杯ほど入れてカルトはちびりと口にした。強烈な苦みの中から浸みだしてくる甘みが、疲れた体と心を癒してくれる。

閉店間際。いつものように人気のない店内を見渡したカルト。餡色の光が満ち、クラシックの優しいBGMが流れた空間は、カルトにとってお気に入りの場所の一つだった。

顔をカウンターに向けると麟世と目があつた。麟世はカルトを見て嬉しそうに口元に笑みを浮かべると、食器を洗う手を休めることなく、独り言のように呟いた。

「紫ちゃんから話を聞いたわよ。頑張ったみたいね。これが、良い思い出になれば良いんだけどね」

カルトは何も答えず、麟世の横顔をジッと見つめていた。

白河麟世。美しい女性だと思う。天真爛漫で、その明るさはいつ如何なる時も、カルトの支えとなってくれている。半年ほど前までは、同じクラスであるにも関わらず話したこともなかった。しかし、今はこうして二人きりで話す時間が増えている。いや、カルトは麟世と二人きりになれる時間を狙って、閉店間際のアルルーナに来ていた。

カルトにとって、彼女が特別な存在なのは間違いない。しかし、それが恋か愛かと問われれば、答えることが出来ない。世間一般で

言う「好き」と「愛してる」は、カルトにとって若干違う。どちらかと言えば、異性に抱く感情と言うよりも、友人などに向ける親愛の情が強いのかも知れない。しかし、それでも麟世と二人になれることはカルトにとって嬉しくもあり、時折見せる艶やかな顔は、グツと胃の辺りを重くすることもある。

「私も、紫ちゃんみたいな恋が出来たらいいな」

恥ずかしそうに目を細める麟世。

「ふ〜ん……………」

カルトは悪戯な笑みを浮かべ、麟世の艶っぽい横顔を見つめた。

カルトの視線に気がついたのか、麟世ははにかんだ笑みを浮かべる。

「何？カルト君、何か言いたそうね」

「紫から話を聞いた麟ちゃんは、今回の事件をそういう風に思ったんだね」

「だって、良い話じゃない。第三種生命体と人間の恋。それも、叶うことのない恋だと尚更ね」

そう言って笑う麟世は、年相応のお話好きの高校生だ。

「そう。だけど、俺の見解は違うね。火野先輩、アイツは、くせ者だよ？」

カルトの言葉に、麟世は柳眉を曲げる。

「俺が、『妖術の暴露』って本を探していたのは知っているよね？」

「知ってるわよ。そう言えば、最近は騒いでないけど、あれは見つかったの？」

「見つけた。場所は火野先輩の部屋だ」

「え……………」

食器を洗う麟世の手が止まった。カルトは指で隣に座るように指示をした。麟世はエプロンで手を拭くと、カウンターを回ってカルトの横に座った。

「最近、この辺りで起きていた悪魔の召喚事件、その犯人は火野雪路。先輩は、妖術の暴露の写本を作って、売りさばいていたんだ。悪魔を簡単に呼び出せるって触れ込みでね」

「そんな、嘘でしょう……？火野先輩が、そんな危険な写本を売っていたなんて」

「本当だよ。思い出してみて、紫と先輩が最初に出会ったのは、パナルカルプを倒す時だろう？パナルカルプは、妖術の暴露で召喚できる悪魔の一体だ。そして、その現場には、分厚い黒い装丁の本を持った火野先輩が居た。あの区域は、妖魔攻撃隊によって閉鎖されていたんだ。第三種生命体が暴れている所に偶々居合わせていたなんて、あり得ない。ましてや、第三種生命体が見たいからって、普通の人間が妖魔攻撃隊の監視の目をくぐり抜ける事なんて不可能だ」
「だって、火野先輩は……普通の高校生だったのよ？確かに第三種生命体だったけど、火野先輩が出ている時は、悪魔の、バラトロンの意識も記憶も無いはずよ？」

「カルト君、そう言ったわよね？」と、麟世は絶るような眼差しをこちらに送ってくる。確かに、カルトはそう言った。しかし、それは火野雪路という人格があればの話だ。

「もし、最初から火野雪路という人格が無くて、常にバラトロンの意識だとしたら？奴は、潜伏成長型の悪魔だ。姿を隠すのは得意中の得意。俺たちの想像を上回るほど、バラترونが人間に化けていたとしたら、俺たちは気付くことが出来るかどうか分からない」

「紫ちゃんが好きだったのは、火野先輩じゃなくて、バラترونが作りだした火野先輩の幻影だって事？」

「バラترون自体、妖術の暴露に記されている悪魔だ。自分で写本を描くこと自体、それほど難しいことはないだろう。俺と妖魔攻撃隊は、悪魔を召喚した人物、と言っても、そいつ等は自らの召喚した悪魔の最初の被害者になったんだけど、彼らのお金の動きを探った。そしたら、火野先輩に行き着いたんだ。丁度その時、火野先輩が現場にいたから、俺は確信したけどね。」

それに、火野先輩は気がついていたんだよ、自分を妖魔攻撃隊が見張ってることに。そして、紫と妖魔攻撃隊の日下部さんを戦わせようとした。俺は、紫がバラترونと追いかけてっこをしている隙に、

部屋に忍び込んで妖術の暴露を失敬した。仕事の内容は写本の始末だからね、本は先生の家の庭で燃やしたし、写本自体を創り出す火野先輩もこの世から消えた」

「ちよつと待ってよ！それじゃ、紫ちゃんは何？最初から最後までずつと騙されていたってわけ？そんな、酷すぎるよ………！」

「火野先輩は、最後の最後で俺の渡したミサンガを引き千切った。あれは、逆だったんだよ。火野先輩は紫に殺されるためにミサンガを外したのではなく、紫を殺すためにミサンガを外したんだ。紫は、火野先輩を殺す事が出来なかった。それを知っていたからこそ、無防備な紫を殺そうとした。まあ、結果は麟ちゃんの知っての通りだけれどね」

「……………」

麟世は黙ってしまった。カルトの話は、紫の話と正反対の内容だ。結果は同じだが、過程が違う。それぞれに視点で見れば、事件は全く別の様相を描き出す。セリスは、このことを言っていたのだ。

「その話が本当だとするなら、紫ちゃん、可哀想すぎるよ」

「別に、俺の話を麟ちゃんが信じることはないよ。麟ちゃんは麟ちゃんの視点で、事件を見てきたんだから。自分の描いた内容で事件の過程と結果を結びつければいい。これはね、月と同じなんだよ」

「月？」

麟世は外を見るが、生憎と店内からは月を見ることは出来なかった。

「月は一つしかないけどさ、見る時間と場所によって、見え方が違うでしょう？紫は光の当たる満月を見続け、俺は日の当たらない新月、闇を見続けた。麟ちゃんは、紫の描いた結末と、俺の結末を知った。たぶん、麟ちゃんも新月でもない、半月を見ているんだよ。大地は大地で別の形の月を見て、先生も違う月を見ているはずだよ」

「じゃあ、火野先輩は？火野先輩は、何を見ていたの？」

「それは……………」

カルトは言葉を切った。火野雪路が何を考え、何を思ったのか、それはカルトには分からない。恐らく、紫にも分からないだろう。

「火野先輩は、恐らく、全てが見えていたんじゃないかな。同時に見る事は出来ないけど、満月の部分も、闇の部分も、見ようと思う場所を見られたんだと思うよ。と言っても、もう結果は導かれていくからね。今更それを知ることとは出来ない。だから、紫には紫の結末があつて、俺には俺の結末がある。それで良いんだよ」

「それぞれの結末か。なんだか、マルチエンディングっぽくなったわね。これって、バットエンドって奴なのかしら？」

麟世の言葉に、カルトは「ハハハ」と笑った。長い髪をかき上げたカルトは、これまでにない意地悪な笑みを浮かべた。

「見方の問題もあるけど、並べ替えの問題でもある」
「?どういう事？」

「麟ちゃん、最初に紫の話を聞いたんでしょ? まあ、小説にするなら、これがエピソードで、麟ちゃんは紫から最終章の話を聞いた。そして、良い終わり方だと思ったわけだね?」

「うん。まあ、そうね。そして、エピソードで大した活躍もしてない人に別の真相を聞いて、ちょっと消化不良になったの。なんて言うのかしら、悪い意味で期待を裏切られたムカムカするような感覚よね」

「大して活躍してない人ってのは置いといて、もし、俺の話が最終章の手前で語られていたなら、これはまた違う終わり方だと思うんだ。本当は火野雪路という人格があつて、紫のためにミサンガを外した。ってなるかも知れない。同じ結果になるとしても、順番が大事なんだよね。」

占い同じだよ。同じ内容を筋道を追って話すのではなく、順番を入れ替えてあたかも凄いことを言っていると錯覚させる」

「良くある手口だよ」と、カルトはすっかり冷えたエスプレッソをチビりと飲んだ。

「そう、その良くある手口って言うのを知っていて、あえて私の気

分を損ねたって事ね」

「……………」

図星だった。麟世の幸せそうな笑顔を見て、何となく悪戯してみたくなったのだ。話の内容は嘘ではないが、これは『言わなくても良いこと』、『知らなくても良いこと』に分類される。

「ねえ、カルト君。知らぬが仏、って言葉知ってる？」

「……………うん、まあ。人間、知らない方が幸せだったてことも、あるよね」

「そうよね」

麟世は立ち上がると、カウンターの向こうに戻り、再び食器洗いを始めた。そして、ヒョイツと飲みかけのエスプレッソを手にすると、それを洗ってしまった。

「あつ、飲みかけなんだけど」

「カルト君、もう閉店です！」

ツンツと不機嫌そうにそっぽを向いた麟世は、ガラスに映ったカルトに向けてベーツと舌を出した。

エピソード 真相は満月と新月なの？（後書き）

最後まで読んでいただいた方々、本当にありがとうございます。
作品を通して、文末を揃えるなど、色々な趣向を凝らしてみました。

その所為もあって、読みにくい文章を書いてしまったことをお詫
び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7855q/>

紫光は星空の彼方へ

2011年5月1日12時55分発行